学図 小国414

教育學部
資料室

文部省検定済教科書

財団法人
日本新教育研究会編修

国語 八

学校図書株式会社発行

小KC
G16

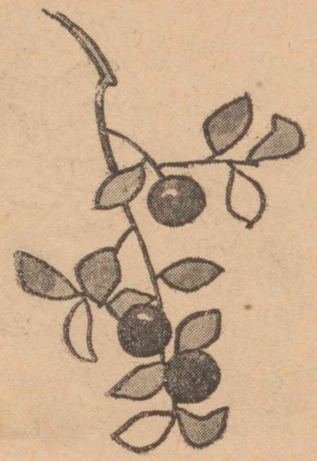
60377
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49672

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449672

昭和二十五年　月

日文部省検定済小学校国語科用



国語八

第四学年用 下巻

広島大学図書
0130449672

学校図書株式会社

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449672

もくろく

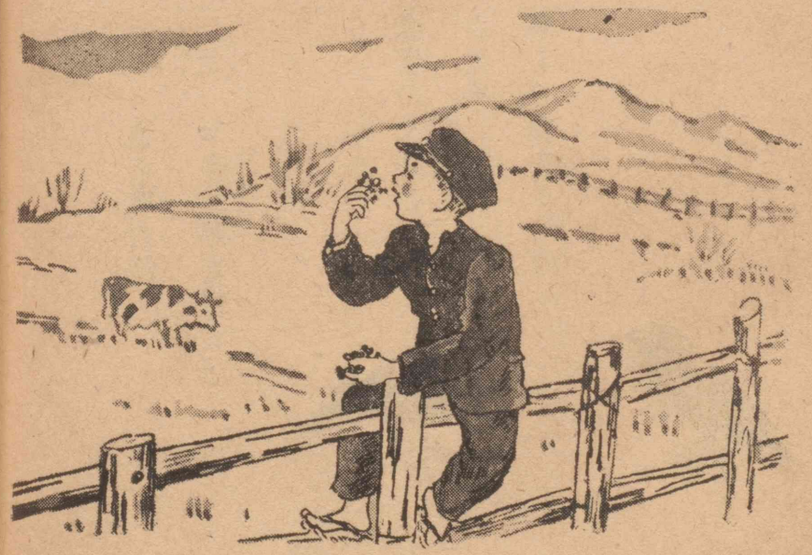
一、秋のうた
○ まきばのさくに　4
○ 月　6
○ しらかばの林　7
○ おかの上から　8
二、学級文庫
(一) 相談　10
(二) 読書週間のポスター　23
(三) 学級読書会　27
三、雪来る前の高原の話　38
四、げき　―友だち―　58
五、思い出
(一) 秋の日　74
(二) 小さいころ　76

(三) もうないてもいい　81
(四) 四年生になってから　87
六、たんけんたい
(一) 川をのぼる　94
(二) 先生の話　112
七、ことばと文字
(一) とし子さんの研究　118
(二) ある夜の話
(三) ローマ字を読まう　121
学習のてびき　(6)
かん字　(5)
新しく出たことば　(1)

一、秋のうた

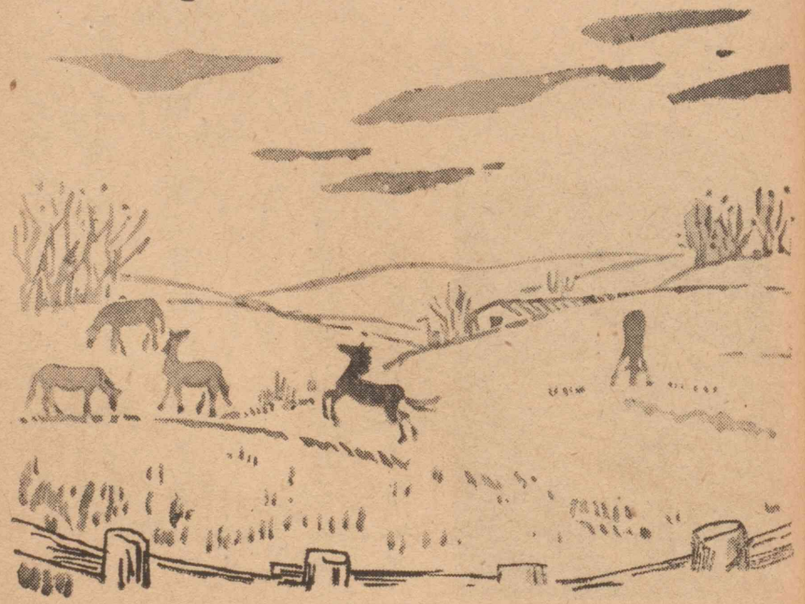
○　まきばのさくに

まきばのさくに
こしかけて
——広い世界のことなどを
ふしぎな
火星のことなどを



もいだぶどうを
たべながら
——地球はまるいと
いうことを
いちどいきたい海などを

ぼくはひとりで
かんがえる
——死んだ子うしのことなどを
遠い
むかしのことなどを



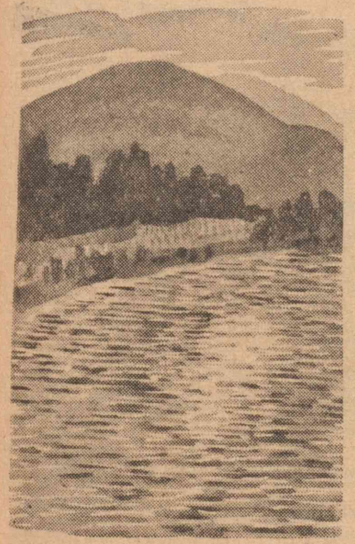
○ 月

こずえの上から見る月は
よべばきこえる月でしょうか
——木の葉に月はおりてくる

海の底から見る月は
ゆらゆらゆれてる月でしょうか
——魚も月を見てましょうか

雪の中から見る月は
すぐにとれそな月でしょうか
——かりは月からくるでしょうか

ある夜ひそかにまるい月
ある夜ひそかにまるい月



○ しらかばの林

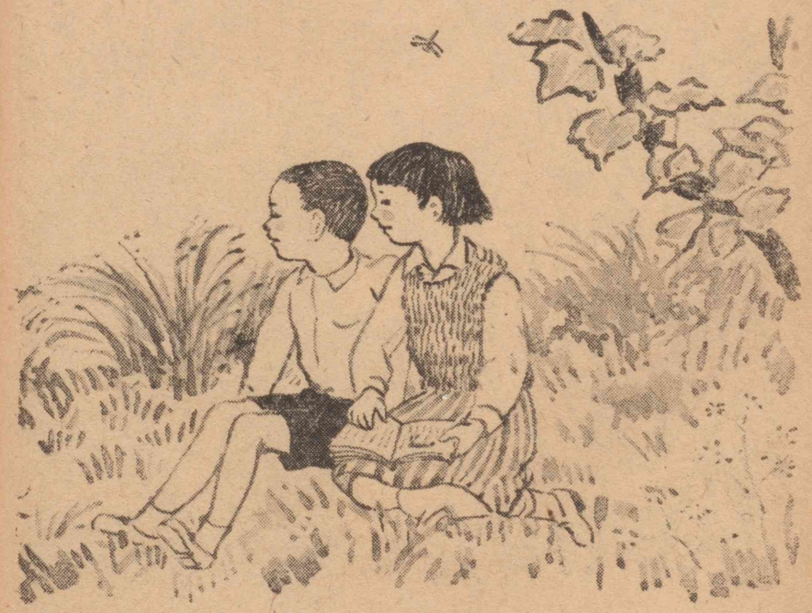
うまのひとみに
ちらりと
うつる
しらかばの白さと
秋の空

○　おかの上から

おかにのぼれば　秋の風
開いた童話が　めくられて
子じかのさしえが　美しい。

赤いつたの葉　赤とんぼ
すすきのかげが　ゆれてます。

おかにのぼれば　秋の風
はるか港の　白い船

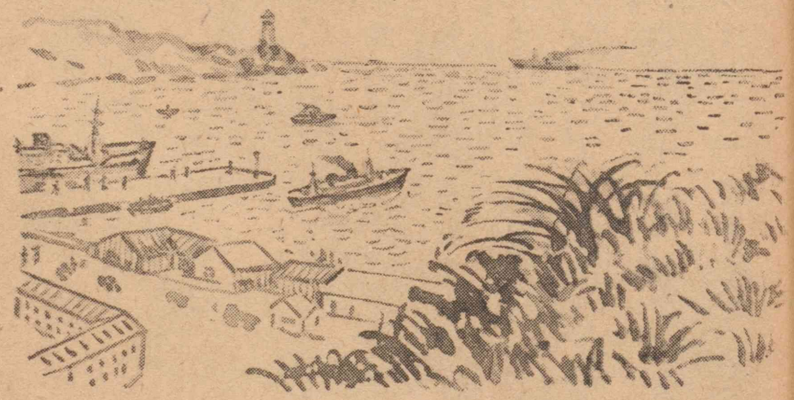


波がきらきら　光ります。

デッキを歩く　外国人
汽てきがボーと　鳴りました。

おかにのぼれば　秋の風
ぼくらの学校　日曜日
ピアノの音が　流れてる。

おーい　おーいと　よんでみる……
あれは遠くの　波の音。



二、学級文庫

(一) 相談

としお「それでは、これから学級文庫の相談を始めましょう。まず、これまでに集まった本について、お知らせいたします。わたしたちが持ちよった本やざっしが八十六さつ、学級のおかねで買った新しい本が、十二さつ、川村くんのたんじょう日に、川村くんのおとうさんが、きふしてくださった本が、十さつです。全部で百八さつになりました。(はくしゅ) このほかに、来月は、わた

したちが出しあったおかねで十さつぐらいは買えると思います。

きょうの相談は、まず第一にこの本やざっしを、どんなふうにならべたらいいかということについてです。みんなが読むのにつごうのいいならべかたのことです。

二番目は、来月は、どんな本を買ったらいいかというこ

とです。三番目は、こんどの読書週間に、わたしたちの学級ではどんなことをしたらいいかということです。この三つのことについて、みなさんに相談したいと思います。まず、第一の本のならべかたについて――話しあいましょう。

「はい！」

「はい！」

としお「山田くん。」

山田「今までどおり、本とざっしに分けるだけでいいと思います。」

「はい！」

「はい！」

としお「田口さん。」

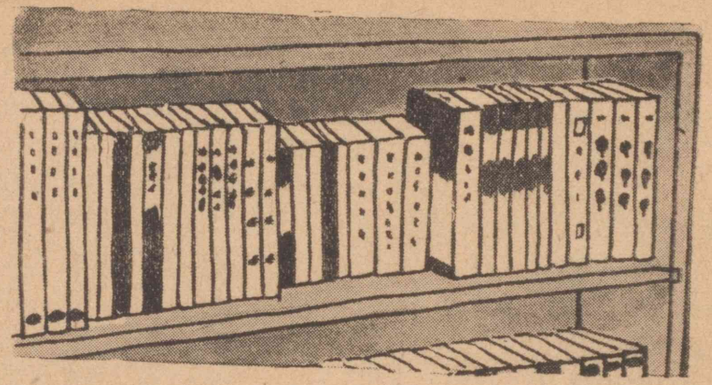
田口「わたしは、大きい本と小さい本とに分けるといいと思います。ならべたとき、きれいに見えていいと思います。」

「はい！」「はい！」

「はい！」

としお「木村くん。」

木村「今、田口さんが言ったようにならべると、ならべたときは、きれいに見える



かもしれませんが、読むにはかえってこまるだろうと思います。やはり、自分の読みたいと思う本がすぐさがし出せるように、ならべておくほうがいいと思います。それには、学校図書館でならべているように、00から90までに分けたらどうでしょうか。

「さんせい、さんせい。」

「はい、はい！」

「はい！」

としお「木村くんの意見に反対のかたはありませんか。」

「はい！」「はい！」

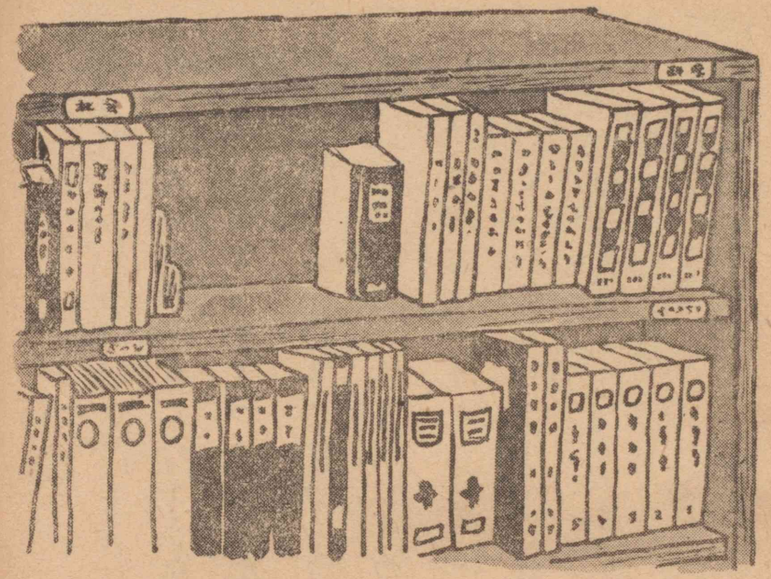
としお「はい、上原さん。」

上原「はい、木村さんのような分けかたは、わたしたちの学級文庫に本が何百何千さつと多くなったときには、いいと思いますが、百さつぐらいの本ですから、そんなに細かに分けなくてもいいと思います。それよりは『ものがたり』の本と『科学』の本と『社会科』の本と、それに『ざっし』の四つぐらいに分けてならべたほうがいいと思いますが、どうでしょうか。」

「さんせい！」「さんせい！」

「はい！」

としお「深川くん。」



深川「わたしは今の上原さんの考えにさんせいです。本が少ないうちは、そのほうがいいと思います。」

「さんせい！」

「そうです。」

としお「それでは、上原さんの言ったように、ものがたり、科学、社会科、ざっしの四つに分けてならべることにさんせいの人は、手を上げてください。」

（手を上げる人――おおぜい）

としお「はい、わかりました。それでは、この本を、四つに分けてならべることにしましょう。（はくしゅ）

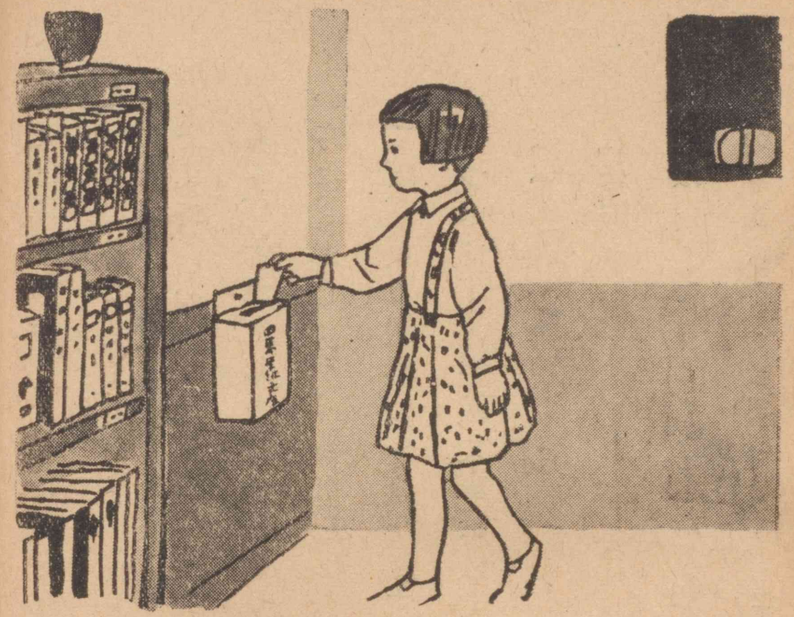
そして、わたしたちの学級文庫の本が、何百さつと多くなってきたら、木村くんの考えのように、学校図書館と同じような分けかたにしましょう。早くそれくらい本が多くなればいいですね。

では、次の問題にうつります。来月、どんな本を買ったらいいかについて――学級文庫にほしい本を言ってください。」

「はい！」「はい！」

としお「岩田さん。」

岩田「はい、今ここで、みんなが買いたい本をのべあっても、なかなかきまらないと思います。それよりも、自分で買ってほしいと



思う本があったら、紙に書いて、希望ばこに入れるようにしたらどうでしょうか。」

（さんせい、さんせいという声が多い。）

としお「それでは、さっそく希望ばこを作って、それに買ってほしい本の名まえを書いて入れることにしましょう。それをせいりして、先生のお考えもうかがって、いい本を買うようにしましょう。いいですね。（はくしゅ）

それでは、そうきめます。

では、次の問題にうつります。こんどの読書週間にはどんなことをしたらいいかという問題です。

「はい！」「はい！」

としお「山田くん。」

山田「読書週間のポスターを書いて、教室やろうかにはり出したらいいと思います。みんなが本を読みたくなるようなことばと絵を書くのです。本を読もうという心が強くなるだろうと思います。」

「はい！」「はい！」

としお「森下さん。」

森下「わたしも、山田さんと同じ意見です。そのポスターは、美しい絵を入れて一年生や二年生にもよくわかるやさしいことばで書いたほうがいいと思います。」

「さんせい！」「さんせい！」

「はい！」「さんせい！」

としお「草川さん。」

草川「わたしもさんせいです。そのポスターは、学校の中だけでなく、家の前にもはったほうが

いいと思います。そうすれば、読書週間を知らない人たちにも、知らせることができると思います。」

（さんせいの声と、はくしゅが続く。）

としお「そのほかちがった考えはありませんか。」

「はい！」

としお「木村くん。」

木村「わたしたちの学級で、読書会を開いたらいいと思います。学校図書館でも読書会を開くでしょうが、わたしたちの学級でも開いたらいいと思います。ど

うですか、みなさん」。

（さんせい、さんせいという声がおこる。）

としお「読書会といっても、どんな読書会にしますか。」

川村「はい、おもしろく読んだ本の感想の発表をしたらいいと思います。」

田口「感想発表だけではつまらないわ。」

上原「げきを入れましょうよ。」

深川「音楽も入れたら、楽しくなると思います。」

岩田「紙しばいや、にんぎょうげきも入れることにしましょう。」

としお「それでは、楽しい読書会ができるように、委員の人たちに、プログラムを作ってもらうようにしたら、どうですか。（さんせいという声がおこる）読書週間には、ポスターを作ることと、学級の読書会を開くこと、この二つをきめていいですね。（さんせい、さんせい）それではこれできょうの相談を終ることにいたします。これから本を分けてならべる仕事と、希望ばこを作る仕事をいたしましょう。」（はくしゅ）

（二）読書週間のポスター

読書週間が近づいて、町の書店もにぎやかになりました。町にもポスターがはり出されました。としおくんたちの学級では、次のようなポスターを、作りました。どうぞ、よくごらんください。

楽しく本を
読みましょう

1日から
7日まで

読書週間
四年東組

十一月一日ー七日
しずかな心で
本を読み
ましょう
読書週間

なかよく 楽しく
本を読みましょう

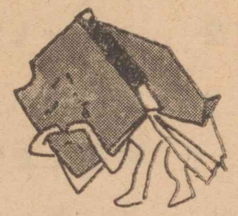
読書週間
一日——七日

明かるいところで
楽しい読書

読書週間

読書週間

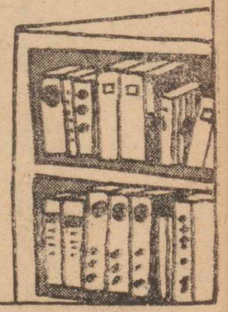
本をかわいがり
ましょう



11月1日ー7日

よい本から
よいこころ

読書週間



11月1日ー7日
読書週間

よい本は終りまで
読みとおそう

やくそく

1 本を読む前に手をきれいにしましょう。

2 正しいしせいで読みましょう。

3 本と目の間を30センチいじょうはなしましょう。

4 よい本を読んだら、友だちにすすめましょう。

5 読み終ったら、わすれずに、もとのところへ返しましょう。

6 本の出し入れをていねいにしましょう。

7 口をむすんで、しずかな心で読みましょう。

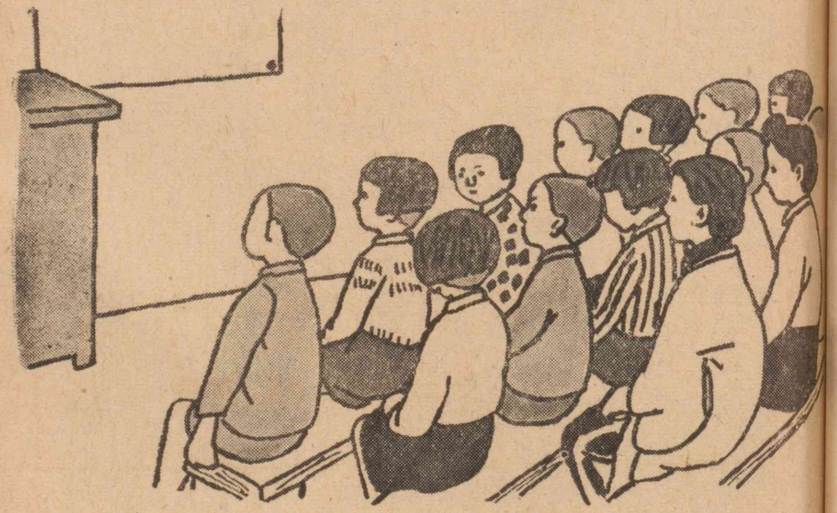
読書週間 11月1日－7日

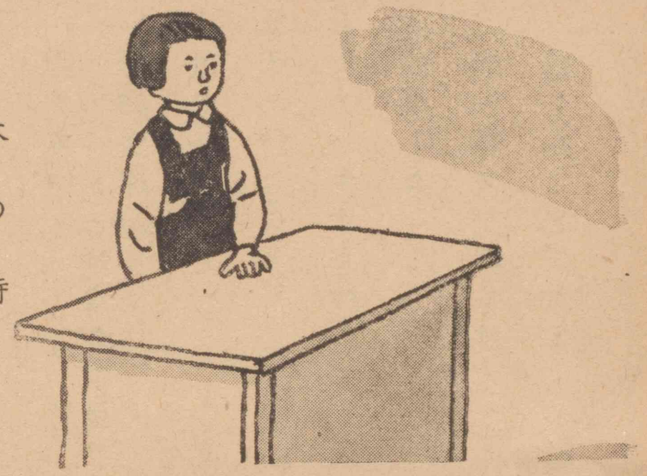
四年東組 学級文庫

(三) 学級読書会

四年東組
学級文庫　読書会プログラム

1 はじめのことば……高野としお
2 本の詩（ろうどく）……山田しげる
3 ピノッキオを読んで……森下かず子
4 読書しらべ……図書委員
5 赤い鳥童話集を読んで
感じたこと……岩田しずえ





6 ゆびにんぎょう……木村いちろう
7 「わたしたちのことば」を
読んだ感想……北川たかし
8 雪来る前の高原の話…船木いちろう
9 「星の話」を読んで…小野しゅう一
10 感想……清川先生
11 おわりのことば……秋山ちよ

—おわり—

本の詩

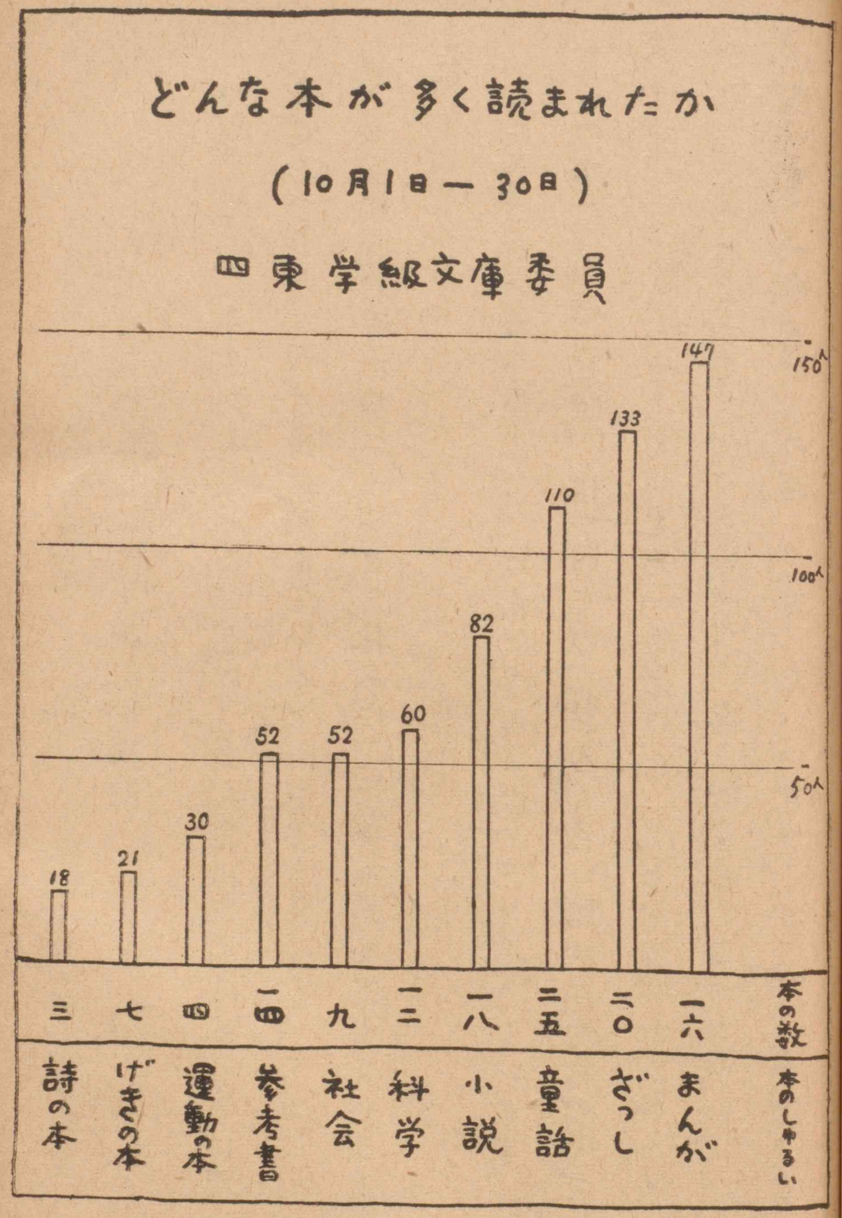
ひっそりと、
本だなのすみで死んでるような、
本はふしぎだ　生きている。
わたしが読むと、
本はふしぎだ　生きてくる。
そしてわたしをつれていく。
遠いむかしの森の中。
さばくの中のらくだのせ。
海こえ山こえ空を飛び、
星の世界へつれていく。
本はふしぎだ　生きている。
わたしが読むと、
本はふしぎだ　生きてくる。

読書調べ

わたしたちの学級文庫でどんな本が多く読まれたかを、調べてみました。次のグラフは、それをまとめたものです。

これは、十月一日から三十日までの間の調べです。

いちばん多く読まれたのは、まんがで百四十七人、いちばん少なかったのは、詩の本で十八人でした。科学、社会、参考書は、本の数が少ないためかも知れませんが、あまり読まれておりません。来月は、どんな本を読みたいと思うかを調べて、みなさんに発表しようと思っております。



「わたしたちのことば」を読んだ感想

わたしはこの本を読み始めたときは、そんなにおもしろいとは思いませんでした。だんだん読んでいくと、おもしろくなってきて、とうとう終りの百十四ページまで休みなしに読み通してしまいました。

わたしはこの本を読んで、ほんとうによかったと思っています。

この本には「ことば」についての、おもしろい話が二十六のっています。中でもおもしろいと思った話は、「ことばはだれが作ったか」「土地によってちがうことば」「高く言うところのちがい」「ちいさこべのすがるの話」「ていねいに言うことば」「子供のことば」「ことばのおこり」「一つ一つのことばのおこり」などです。

この中の「高く言うところのちがい」という話をお知らせしましょう。

東京の人が、大阪（おおさか）や京都（きょうと）のことばを聞くと、おかしいくらいへんなことがあります。また東北のことばや、九しゅうのことばについても同じです。

たとえば、「早くいかなくてはだめですよ」を、

「はようゆかんとあけへんがな」

と、言うばかりでなく、そのことばを、話す調子がちがっているからです。一つ一つのことばの言いかたが、かわっているからです。

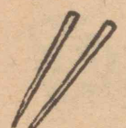
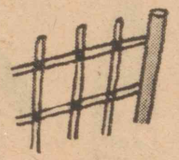
たとえば、東京では空のクモも、虫のクモもおなじように言いま

すが、名古屋（なごや）あたりでは、虫のクモは、東京と同じようにクを高く言いますが、空のクモは、同じくらいに言います。ですから、東京の人が名古屋にいって、

「大きなクモが出てきた」。

と言えば、空を見ないで、あたりを見まわすでしょう。

東京では、海をウミといって、ウを高く、ミを低く言いますが、関西（かんさい）の人は、これをウミと、ミをウよりも高く言いますから、東京の人がこれを聞くと、おできのウミかと思います。

また関西の人は、花をハナと言って、ハをナよりも高く言いますから、東京の人には、もののさきのことをいうハナかと思われます。鹿児島（かごしま）や長崎（ながさき）の人は、顔のまん中にあるハナかと思います。

このように、同じことばを、その中のどこを高く言うか、低く言うかによって、別の意味に使っていることばも、たくさんあります。

（ハシ）川のハシ、たべるハシ、もののハシ、

（カキ）木になるカキ、貝のカキ、かきねのカキ、

（カウ）ネコをやしなうカウ、買う時のカウ、

（サケ）魚のサケ、のむサケ、
（フク）風がフク、ぞうきんでフク、
（キ）キ（木）がない、キ（気）がない。
（エ）エのない本、エのないひしゃく、

のように、高く言うのと、言わないのとあります。これがちがうと、ことばがよく通じません。通じないばかりか、とんだまちがいがおこることもあります。

こんな調子でこの本はおもしろく書かれています。これまでわたしは、童話とまんがを読んでいましたが、これからは、こういう本も読んでみようと思い

ました。

この本を読んでいて、これはだいじだと思ったところは、ノートに書き取っておきました。そして、わたしたちのいつも使っていることばの中で、この本に出ているような、おもしろいものを、ノートに書いて研究しています。この研究ができあがったら、発表したいと思っています。

みなさんも、この本をお読みになるようにおすすめいたします。

これでわたしの発表を終ります。（はくしゅ）

「それでは次にうつります。船木さんのお話『雪来る前の高原の話』です。」（はくしゅ）

三、雪来る前の高原の話

それは、けわしい山のふもとのあれ野のできごとであります。山からは石炭がほられました。それをトロッコにのせて、日にいくたびということなく、高い山からふもとの方へ運んで来たのであります。ゴロッ、ゴロッ、ゴーという音をたてて、石炭をのせた車は、レールの上をすべりながら走っていきました。そのたびに、はこの中にはいっている石炭は、美しい歯を光らして、おもしろそうにわらっていました。

「わたしたちは、あの暗い寒いあなの中から出されて、この明かるい世界へ来た。目にうつるものは、なに一つとしてめずらしくないものはない。これからどこに送られるだろう」。

と、同じようなすがたをした石炭は語り合っていました。

だんまりばこは、これに対してなんとも答えません。むしろ、それについて知らないといった方がいいでしょう。しかし、レールは、そのことをよく知っていました。なぜなら、じぶんの作られた工場の中で、たくさんの石炭を見て知っているからであります。今、石炭がいく先を、みんなが話し合っているのを聞くと、一つ喜ばしてやろうとレールは思い、「町の工場へいくのです」と言いました。

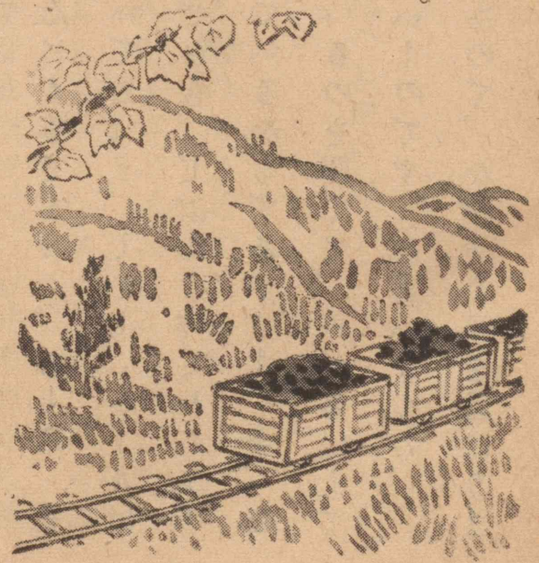
石炭は、不意にレールがそう言ったので、かがやく目を見はりま

した。

「わたしたちは工場へいくんですか。そんなようなことは、山にいる時分から聞いていました。それにしても、なるだけ、遠い所へ送られていきたいものですね。いろいろめずらしいものを、できるだけ多く見たいと思います。それから、わたしたちはどうなるでしょうか。」

と、石炭はたずねました。

レールは考えていましたが、



「あなたがたのなかまがまっかな顔をして働いているのを見ました。そのうちに見えなくなりました。なんでも、次から次へと、空へあがっていったということです。考えると、あなたがたの一生ほど、いろいろと経験なさるものはありますまい。わたしたちは、永久にこのまま動くことさえできないのです。」

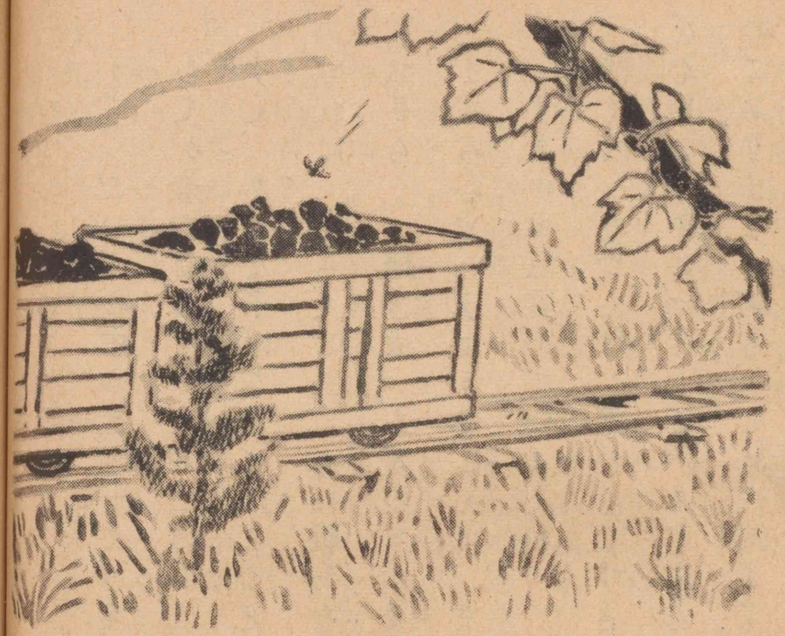
と、言いました。

石炭はトロッコにゆられながら、考え顔をしていました。なんとなく、すべてをほんとうに信ずることができないからでした。

その時、かたわらの赤く色づいたつたの葉の上に、一ぴきのはちが休もうとしてとまっていましたが、トロッコの音がしてねむれなかったので、不平を言っていました。

「なんというやかましい音だろう。びっくりするじゃないか」
と、はちは言いました。
「安心してとまっていらっしゃい。天気がこう悪くては、どこへもいかれないでしょう。野原はさびしいにちがいない。おそざきのりんどうの花も、もうかれた時分です。そして、あの空の雲ゆきのはやいことをごらんなさい。天気のよくなるまで、ここにとまっていて、太陽が出てあたたかになったら、里の方をさして飛んでいらっしゃい」。
と、つたの葉はしんせつに言ってくれました。
わかい一本のすぎが、つたとはちの話をしているのをあざわらいました。

「トロッコの音にたまげたり、これくらいの天気におびえているようで、この山の中の生活ができるものか、もっとも、もう一度あらしが来たなら、つたなどはどこかへふき飛ばされてしまうだろうし、あんな子ばちなどはこごえ死んでしまうことだろう。このおれは、あらしとふぶきに戦わなければならない。そして、もうおそらく、過ぎ去った夏の日のように、銀色にかがやく空の下でまどろむというようなことは、また来年まではできないであろう」。
と、すぎの木は言っていました。
赤くなったつたは、勇かんなすぎの木の言っていることを聞いて、なんとなく年とってしまったじぶんの身の上を、はずかしく感じたのであります。何も、これに対して言うことができませんでした。



そして、すぎの木の言うように、今夜にもすさまじいあらしがふきはしないかと、身ぶるいしながら空をあおいでいました。

赤い葉の面にとまっていた子ばちは飛びあがって、つい近くを走っていった石炭の上にとまりました。この黒いぴかぴか光るものは何だろうと思ったからでした。

石炭はにこにこして、だまっ

てこの小さな生き物の動くようすを見まもっていました。はちは、石炭のにおいをかいだり、また小さな口でなめてみたり、どこから来たかを知ろうとしました。しかし、それはわかるはずがなかったのです。

レールはまた、このはちを知っていました。なぜなら、この小さい、すばしこい、すきとおるように美しいはねをもったはちが、常にこの近所の花から花へ飛びまわっていたからです。

夏のはじめのころに、はちは他のはちと共同して、一つのすを花の間に作っていました。そして、みつを求めにかれらは毎日遠くまで出かけたのでありました。朝日の細い、するどい光のやが、花と花のかげの間からいこむ時分になると、かれらは、レールの上を、

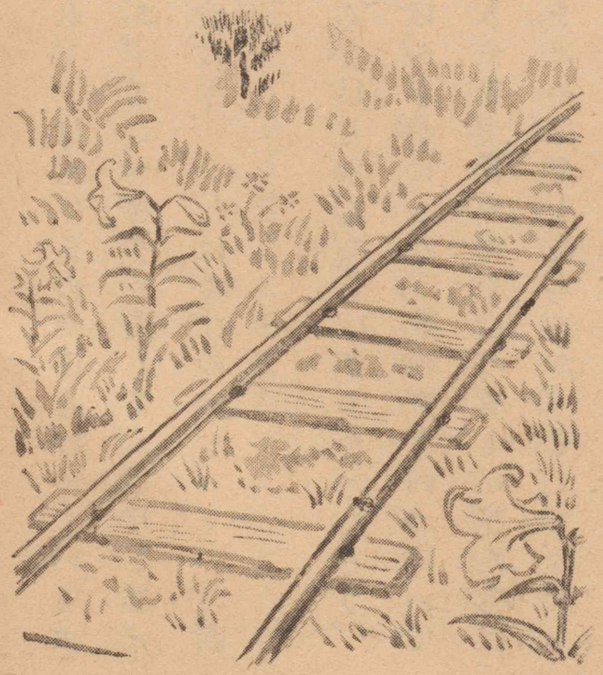
それについて南へ北へと飛んでいったのを、レールは見たのでありました。はちたちがいたる所の花にとまって、うまずにみつを集めている間に、太陽は高くあがりました。そして、トロッコの音がして、レールの上が熱くなり、銀のように白く光る風が、高原をわたったのであります。毎日かれらは同じように働きました。そのうちに、すの中に産み落とされたたまごは、一ぴきのはちとなり、めいめいはいずこへともなく飛んでいきました。またわずかに残ったはちは夏の終りまで、同じ所を去らなかったのであります。

花は季節のうつりとともに、だんだん少なくなり、散っていきました。はちはレールの上にとまって、日の光をあびてじっとしていることもありました。

「もう、じきにトロッコが来ますよ」。

と、レールは、ねむっているはちをゆり起こしてやったこともあります。はちは飛び去りました。空の色は青々として晴れていました。はちはどこへいっても自由であったのだけれども、やはり、このあたりから去りませんでした。

高い山には秋が来て、冷気のたつのが、里の方よりもずっと早いのでした。いろいろの虫が、じぶんたちの身の上



を悲しんでないまています。けれど、はちはその地面をはっている虫のようには悲しみませんでした。どこへなりと飛んでいこうと思えばいけたからです。けれど、やはり、かれは古すのかかっている所をこいしがっていました。

夏のはじめの時分には、どんなにじぶんたちは楽しかったろう。このあたりは、じぶんたちのほがらかにうたう歌の声でいっぱいでありました。そして、むらさきや赤や青や黄や白の美しい花たちは、いずれもじぶんたちのすがたをほめはやしたものだ。そして、少しでも長く、じぶんたちの所にいてもらいたいと願ったものだ。しかし、もうじぶんたちのなかまは散ってしまった。けれど、なんで、もう一度ああいうことが来ないといえよう……はちには、こんなこ

とも空想されたのでした。

太陽がだんだん方向をかえて、レールの上がかげり、地の上が冷たくなって、下のえだには、終日、日があたらないことがあるようになってから、かれは、高いえだにからんだつたの葉にとまっていたのでした。いつしか、このつたの葉もまた赤く色づいてきたのであります。しかし、やさしいつたの葉は、じぶんのやがて散ることもわすれて、常にはちをなぐさめていました。

「もうじきに太陽があがりますよ。そうするとあたたかになります。」と、つたの葉は言いました。

ですが、たえず、すぎのわか木は、周囲の草や、木や、虫などをあざわらっていたのです。

「おれはひとり戦わなければならない。みんなが、いくじなくかれたり、散ったり、死んだりしてしまった時、ふぶきとあらしに向かってさけび戦わなければならない」。

と、ほこり顔に言っていました。

しかし、だれもそれに対して反対するものはなかったのです。すべて、すぎのわか木の言う通りだったからです。

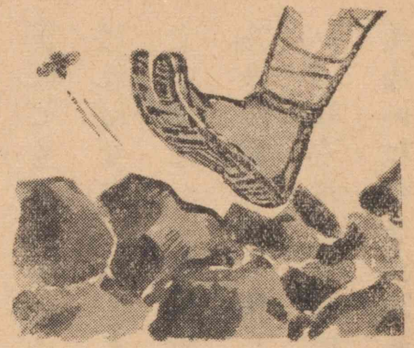
石炭にとまって、はちがじっとしていると、

「わたしたちといっしょに町へいきませんか。わたしたちはどうせ工場へ連れていかれるだろうけれど、あなたは町へいったら、自由にどこへでも飛んでいきなさるがいい。町はにぎやかであたたかだということを聞いています。わたしたちもまた、町ははじめ

てだが、そこは明かるくて、いろいろな美しいものがあるということです。……わたしたちといっしょにいきませんか」。

と、石炭ははちに向かって言いました。

はちは考えました。じぶんは、あまり寒くならないうちに、かくれ場所を見いださなければならないが、この野原の中にしようか、それとも石炭がいこうとしている町にしようか。もっと考えてみなければならない。年とったなかまは、冬の雪のある間を、寺のひさしの下にかくれ場所を作って、はいっていたというから……このあたりは雪が深く積もって、適当な場所が見いだされないかもしれない。なるほど、石炭の言うように、このまま町へいくとしようかと、美しいはねをふるわして、はちは考えていました。



この時、トロッコの上に乗っていた労働者は、はちに目をとめると、

「このへんにすがあるとみえて、いつか、おれの足をさしたぞ、殺してくれようか。」

と言って、足をあげてはちをふみつぶそうとしました。しかし、はちはあやういところをのがれて飛びたちました。そのあとで、石炭がとばっちりをくって、大さわぎをしていました。

はちはレールについて、もとの場所へ帰ろうと思いました。そこにはやさしいつたの葉が待っていたからです。

はちは、レールについて飛んで来るうちに、レールが苦しそうに

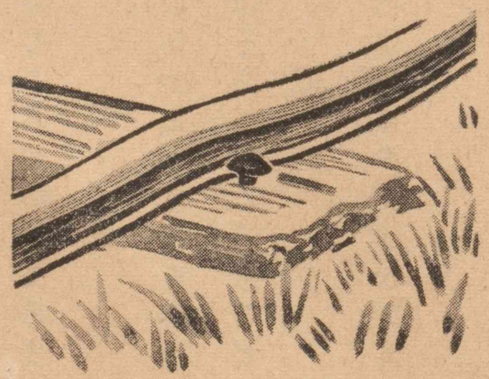
身をまげて地面をはっているのに、はじめて気がついて、

「なんで、あなたはそんなようすをしているのですか。」

と、レールにたずねました。レールは、ものすごい目つきではちを見上げて、

「わたしが、こうして苦しんでいるすがたを、今はじめて気がついたのですか。もう、長い間ここにうめいている。それも、おいぼれたくぎめがしっかりと、わたしのからだをおさえていて放さないからだ。」

と、うらみがましく答えました。



はちは、こんな強そうに見えるレールにも、こうしたなやみと苦

しみがあることをはじめて知ったので、なおもくわしくそのようすを見とどけようと思って、くぎがおさえているところへいってみました。

なるほど、赤くさびた、おいぼれたくぎが、いっしょうけんめいにレールをおさえつけているのでした。はちはそこへ飛んで来てとまると、

「なぜ、そんなにあなたはレールをおさえつけているのですか。」

と、たずねたのであります。

「おれは、人間から言いつかったことをしているのさ。」

「しかし、あなたとレールとは、もと同じ一家ではありませんか。きょうだいといってもいいでしょう。」

と、はちは、同じこう鉄からできているからそう言ったのです。

「しかし、おれが、人間から言いつかったことをわすれて、手を放したら、何か悪い結果になりはしないかと、心配するのだ。」

と、赤くさびたくぎが言いました。

「だが、あなたは、だいぶ年をとっていますから、少しくらい休んだって、だれもふしぎとは思いますまい。」

と、はちは答えたのであります。

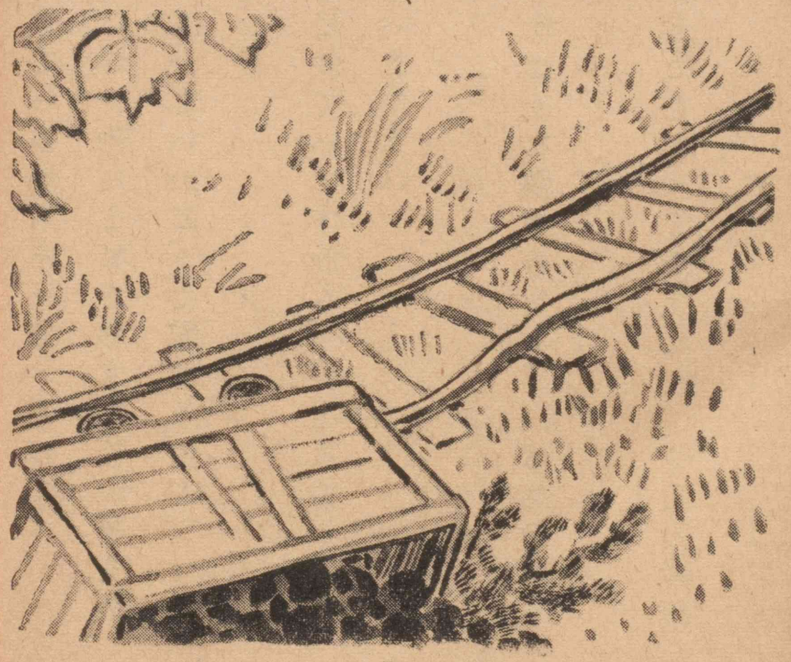
さびたくぎは、なるほどというような顔つきをして、はちの言うことを聞いていました。

はちがやがて赤いつたの葉の上にもどって来ました。つたの葉は空を見上げながら、

「また、あらしになりそうですね」。

と、心配そうな顔つきをしていました。

ひとり、すぎのわか木は、ごうまんに強そうなことを言って、いばっていたのであります。赤さびのしたくぎは、はちの言ったことから、つい気がゆるんでレールをおさえつけていた手を放しました。すると、レールは



すかさず、まげていたからだをのばしたのです。この時、トロッコが、他の石炭を積んで山からくだって来ました。つたの葉の上にとまっていたはちは、さっきの石炭はどこにいったろう……町の工場へはまだ着くまい……と思っていたしゅんかんに、トロッコがだっ線して変な音をたてたかと思うと、こちらへすべって来て、すぎのわか木のそばにひっくり返ったので、すぎの木は石炭におされて曲がってしまいました。

不意のでき事におどろいて、はちは前後をわすれて、かなたの大きなはんの木の所までにげてしまいました。

そのばん、まっ白に、この高原には雪がふったのであります。

四、げ　き　——友だち——

とき——
あるにわか雨の日の午後
ところ——
学校の帰り道
ひと——
みゆき・まり子
としお・ひろし・きよし
そのほか、子どもおおぜい。

ぶたいの中ほどに、大きな木が一本立っている。
雨ガッパを着た子どもが二・三人、ぶたいを通り過ぎる。
三年生ぐらいの子ども1が、かばんをかかえて、かみてからしもてへかけぬける。すぐそのあとから子ども2が、かばんを頭にのせて走って来る。

子ども2　（木の下に走りこんで、1の去った方を見ながら）おうい、ここで雨やどりしていこうよ。おうい……おういったら……

返事がない。2は空を見上げたが、思いきって1のあとを追って去る。
一つのかさに五人くらい頭をつっこんだ男の子たちが、わいわい声をたてながら通り過ぎる。みゆきとまり子、木の下に走りこんでくる。

みゆき　（雨をはらいながら）こんなことだったら、学校で待っているんだった。

まり子　だから、わたしが待ちましょうと言ったのに……。

みゆき　でも、こんなにおおぶりになろうとは思わなかったんですもの。

まり子　ああ、冷たいっ――、首のねっこまで水がはいっちゃった……

みゆき　……ねえ、もう何時かしら。

まり子　そうねえ、学校で見てくるのわすれちゃったけど、三時は過ぎてるんじゃない？

みゆき　あら、もうそんな時間？　こまったわ、わたし……

まり子　でも、きのうより早いわよ。

みゆき　きょうはいいことがあるんだけど……

まり子　いいことって、なあに？

みゆき　おかあさまのね、おたんじょう日。

まり子　まあ、いいわねえ。

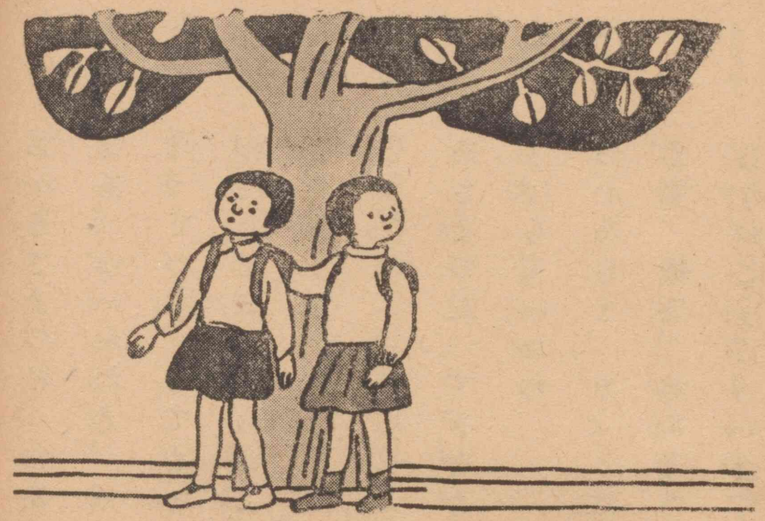
みゆき　帰ってから、とてもいそがしいの。にいさんと、ねえさんと、わたしと三人で、おこづかいを出しあってごちそう作るのよ。

まり子　じゃあ、おかあさまは、お客様みたいね。

みゆき　そうなのよ。どんなごちそうかってことも知らないの。おかあさまのだいすきなものなんだけど、ないしょにしてあるの。

まり子　すばらしいわね。

みゆき　「おかあさま、きょうは、おたんじょう日でおめでとうございます。毎日、わたしたちのおせわをしてくださって、どうもありがとうございます。きょうは、わたしたちで作ったごち



まり子　みゆき

そうを、ゆっくりめしあがってください。」……どう？　あまりかんたんすぎるかしら、わたしがあいさつをすることになったんだけど。……

おかあさまへの感謝の日にするのね。すばらしい思いつきだわ。わたしのおかあさまは、とってもやさしくって、世界一いいかたなの。だから、うんとうんとお祝いしてあげなくっちゃ。

まり子　わたしのおかあさまの時も、そうするわ。

みゆき　わたし、こうしちゃいられないわ。（きゅうにあわてだす。首をまげて、しきりに空を見ながら）なんてにくらしい雨でしょう。こまるわ。おそくなると……

まり子　にわか雨だから、もうすぐやむわよ。

みゆき　ねえ、思いきって出かけない？

まり子　だって——、こんなにふってるんですもの。びしょぬれになってしまうわよ。

みゆき　——もう、知らないっ。（両手で顔をかくす）

まり子　あら、おこったの、……ごめんなさいね。

みゆき　ああら、ちがうのよ、——雨に言ったのよ。

まり子　まあ……。（ふたりは顔を見あわせてくすりとわらいながら、木の向こうがわにかくれる）

としおとひろしときよしが、オーバーを頭からかぶって木の下に走りこむ。

としお　さあ、いいかい。こんどはぼくの番だよ。

ひろし　あんまりむずかしいの、いやだよ。

としお　むずかしいことなんかないよ。いいね、……それは、こうぶつとしょくぶつです。

きよし　作ったものですか。

としお　そうです。

ひろし　しょくぶつは紙ですか。

としお　紙もありますね。

きよし　木はありませんか。

としお　木もありますよ。

ひろし　まだあるんですか。

としお　あります。

きよし　じゃあ、それは竹でしょう。

としお　そうですね。竹でつくった何かです。

ひろし　こうぶつを聞きますがねえ、それは、きんぞくでしょう。

としお　そうです。きんぞくです。

きよし　なんだか、さっぱりけんとうがつかないなあ。

ひろしときよしが、首をひねって考え始める。木のかげから、みゆきとまり子がそうっと出て来る。

みゆき　わかりました。それは、雨がさでしょう。

としお　おやおや、みゆきさんかあ——。横から口を出しちゃあ、ずるいよ。

みゆき　ごめんなさいね。わたし、かさのことばっかり考えていたものですから……。

ひろし　だれもむかえにこなかったの。みゆきさんや、まり子さんは、家が遠いからこまるね。

きよし　そうだよね。ぼくたちは近いから、走っていったってすぐなんだけど……。

まり子　……わたしは、やむまで待っていてもいいんだけど、みゆきさんは、早く帰らなくっちゃこまるのよ。

としお　どうして？

まり子　おかあさんのおたんじょう日なの。帰ってから、ごちそうのしたくをなさるんですって——。

ひろし　へえ……。みゆきさんがごちそうを作るの？

まり子　おかあさまに感謝をする日にしたんですって。だから——。

としお　じゃあ、早く帰らなくっちゃあ——。

みゆき　帰りたいのよ。だけど、こんなにふってるんですもの。こま

ったわ……。（ちらっと空を見て、それからしょげてしまう）

としお　よしっ。じゃあね、こうしよう。ぼくこれからすぐに帰って、かさを持って来てあげる。

みゆき　あら、そんなことをしていただいちゃ……。

としお　いいよ、いいよ。こまった時は、おたがいさまさ。

ひろし　そうだ——。先週の自治会で、みんながはげましあったり、助けあったりして、いい友だちになろうって話しあったんだもの……ね。

きよし　そうだ、そうだ。ぼくも持って来てあげるよ。一本だけじゃあ、まり子さんがこまるからね。

みゆき　うれしいわ。

まり子　だけど……。そのかさ、家でいるんじゃない？

としお　ぼくの家はいいんだ、よぶんが一本あるから。

ひろし　ぼくも、古いカッパがあるからいいんだ。

きよし　ぼくは、雨がやむまで外に出ないようにするからいいんだ。

ひろし　きみ、そんなむりをしなくてもいいよ。かさは、二本あればいいんだろう？

としお　そうしよう。じゃあ、いって来るからね。

みゆき
まり子　すみません、おねがいしますわ。

ひろし　きっと、待ってるんだよ。

きよし　ぼくも、来るからね。

みゆき
まり子　おねがいします。

としお　さあ、出かけよう。一、二の……

ひろし
きよし　三。

三人は、オーバーをかぶりなおして、雨の中にかけ出す。

みゆきとまり子は、右手をふってそれを見送る。三人のすがたが見えなくなると、ほっとした顔で向きあう。

まり子　よかったわねえ。

みゆき　ほんとうに、安心したわ。……わたし、どうしようかと思ったの。

まり子　（もう一度、三人の去った方をふりかえりながら）みんな、いい人たちばかりね。

みゆき　そうね。友だちって、いいものね。

まり子　……みゆきさん。

みゆき　なあに？

まり子　さっき、ひろしさんが言ったことね。

みゆき　なんだったかしら……、自治会のこと？

まり子　ええ。——ほんとうに、おたがいに助けあえる、いい友だちになりましょうね。

みゆき　ええ、きっとね。

まり子　ゆびきりしない？

みゆき　ええいいわ。（ゆびきりをしながら、木の向こうがわにまわってこしをおろす）

雨ガッパを着た子どもが三・四人、ぶたいを通りすぎる。しばらくのあいだ、ぶたいは静かになる。

雨がさをさした男の子が先頭になって、十人ばかりの子どもが、頭をつっこむようなかっこうで、おしあいながらかみてからしもてへがやがやと通り過ぎる。

みゆきとまり子が、心配そうな顔でそうっと出てくる。かわるがわるのびあがって、しもてのほうを見ている。まり子がきゅうにみゆきのそばにかけよる。

まり子　来たわよ。ほら、ほら、ね？　（と、しもてのほうをゆびさして、目を光らせる）

みゆき　（うれしそうに）　あら、ほんとー。としおさんね。

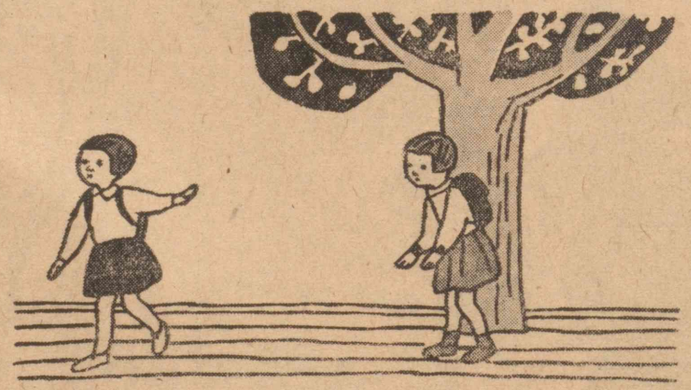
まり子　としおさーん。としおさーん。（と、よびながら、むちゅうでかけだし、ぶたいのしもてに去る。）

みゆき　としおさーん。

（まり子のあとを追って去る。）

……

しずかに、まくがしまる。

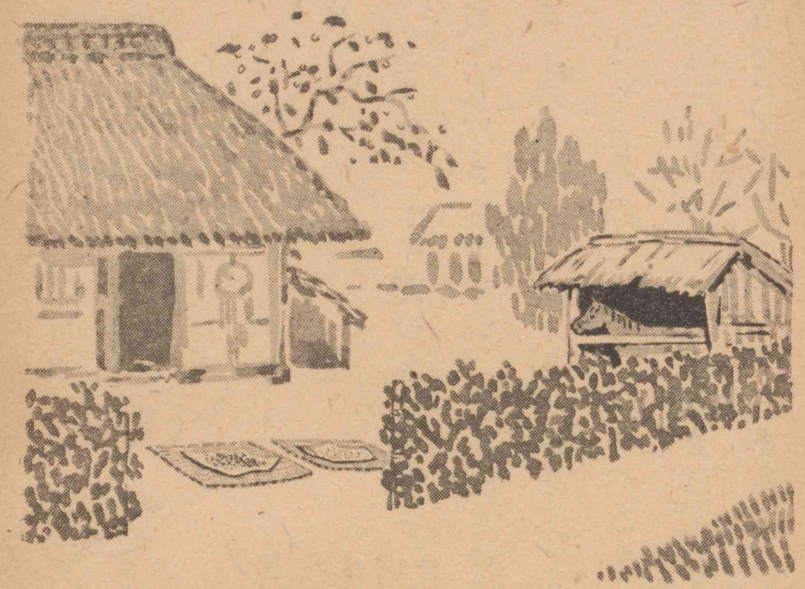


五、思い出

(一) 秋の日

ここだ、ほら、ちょうどここらに、
おみなえし、さいていたっけ。

そうだ、そだ、虫かなんだか、
キョッキョッと鳴いていたっけ。



あそこだよ、うしがいたのは、
あったかい　いい日だったよ。

かあさんが　何かいったよ。
なんだっけ　わすれちゃったよ。

白いごま　ほしてあったよ。
黒いごま　ほしてあったよ。

（二）　小さいころ

きょうは、ぼくのたんじょう日をお祝いしてくださって、ありがとうございます。

ぼくは、十年前のきょう、今いる家で生まれました。今はこのとおりちびさんですが、生まれた時はとてもでぶちゃんで、体重は、三・六キログラムもあったそうです。

まる一年のたんじょう日がこないうちに、もうおかあさんのおちちをいやがって、おかゆをほしがりました。口のまわりをおかゆだらけにしてたべているのを見て、しんるいの人たちは、

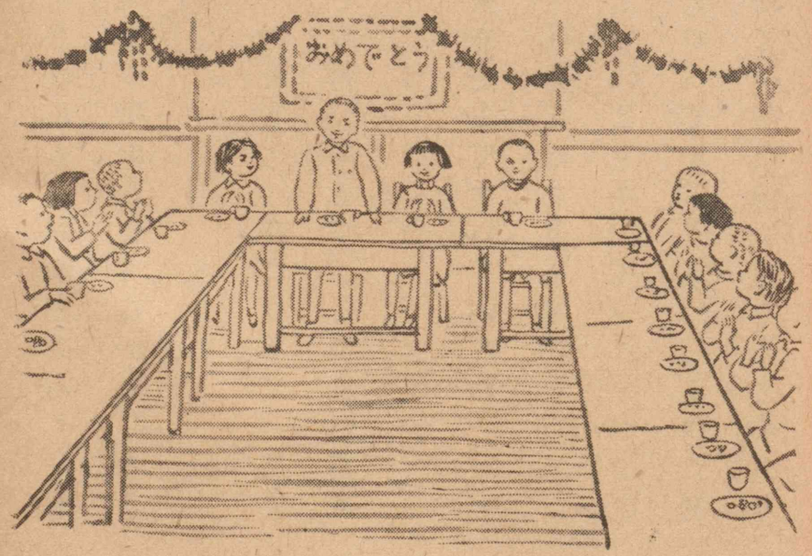
「この子はかわりものだね」。と言って、めずらしがったという話です。

四つの時の冬、ひとりでこたつにはいっていました。うとうとしているうちに、炭火から出る悪いガスをすいこんで、気をうしなってしまいました。

「ぼうや、ぼうや」。

「としお。おい、しっかりしろ」。

いくらよんでも、顔はまっさおだし、



からだは冷たくなっているので、おとうさんも、おかあさんも、もうだめかと思ったそうです。でも、運よく助かりましたから、今このようにぴちぴちしています。

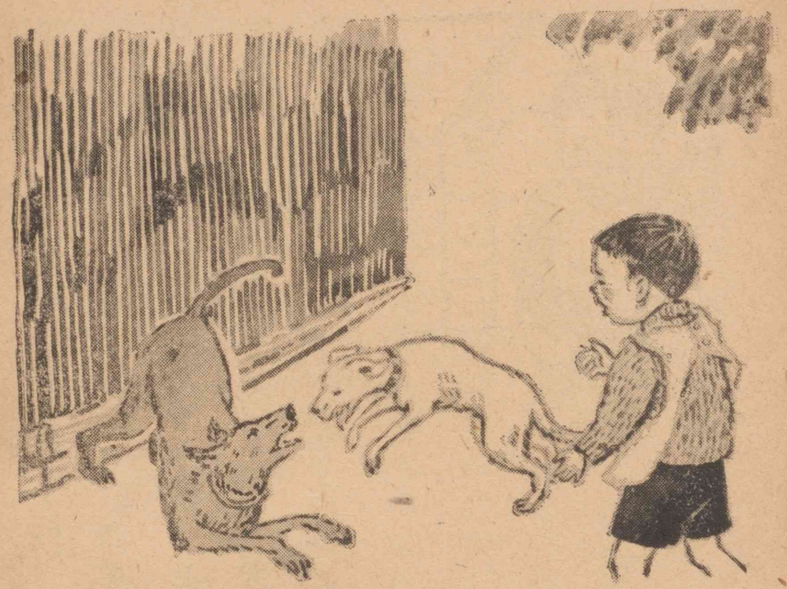
ぼくは、少しもおぼえていません。けれども、冬になって、こたつにはいるようになると、ときどきその話がでます。このあいだも、その話が出て、

「あの時、おかあさんは、おいおい声をだしてないていたね」。

「おとうさんだって、目の中が光っていたではありませんか」。

と話しあいながら、わらっていらっしゃいました。

六つの時でした。これはよくおぼえています。うちに「シロ」といういぬがいました。「シロ」をつれて遊びに出かけたことがあり



ます。

「シロ」はぼくのさきになって走っていきました。黒いへいのある家の前までいくと、茶色の大きないぬが出てきて、いきなり、「ワン、ワン、ワンワン」。とほえついたのです。びっくりしてなきだすと、「シロ」がものすごいいきおいでかけもどってきました。そして、そのいぬとかみあって、とうとうその大きないぬをへいの中へ

おしこんでしまいました。

それから、ぼくと「シロ」はすっかり友だちになって、ぼくのごはんをよく「シロ」にやりました。

もう、五・六年もたっていますが、ぼくはその時の「シロ」の働きぶりを、今でもはっきりおぼえています。

（三）もうないてもいい

一年生の時の正月、ぼくは長野（ながの）県のおじさんのうちへいったことがある。おじさんの村は山のふもとにあるので、雪が深い。屋根の上には、五十センチも雪が積もっていた。

ある日、おじさんのうちのまさ子さんや、のりおくんといっしょにとうふを買いにいった。とうふ屋は、たんぼをこえ、だんだん畑をこえた坂道にあった。

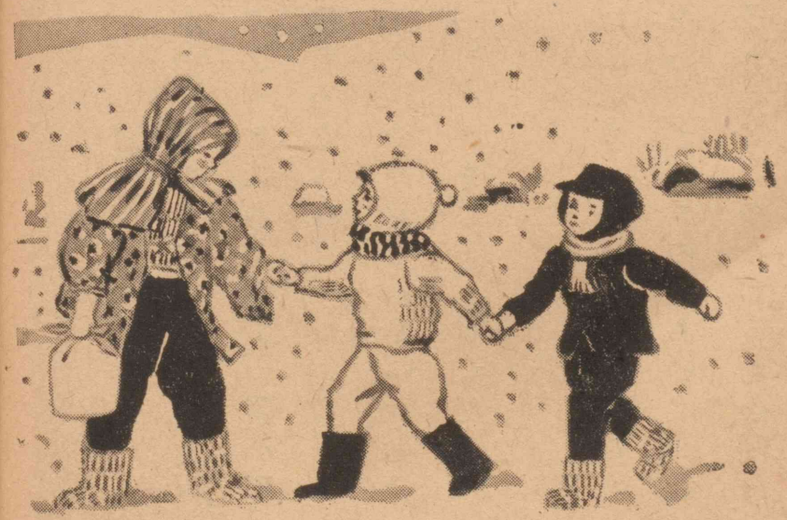
はい色にくもっていた空が、帰りにはふぶきになってきた。たんぼへ来たら、どこが道だかよくわからない。さっきの足あとは、ふぶきで消えてしまった。ぼくは、まさ子さんと、のりおくんの間に

はいって、小川にそった道らしいところを歩いていった。雪の中に、ぽこんぽこんとあいているまさ子さんの足あとのあなを追いながら、進んでいくうちに、どうしたはずみか、小川にすべり落ちてしまった。

ふたりにひっぱりあげてもらったけれども、手も、顔も、えりくびも雪だらけ、足はびしょぬれになっていた。

ぼくは、もう少しでなきそうになった。

まさ子さんは、雪をはらいながら、



「しげるさん、ないちゃだめよ。一年生だからなくんじゃないよ」。

と元気をつけてくれた。その時、まさ子さんは四年生だったと思う。

また、まさ子さんのあとについて歩きだした。足はこおりつきそうだし、ふぶきは顔にふきつける。すっ、すっと、はな水をすする。

すると、

「しげるさん、ないちゃだめよ。もうすぐうちだから」。

と、まさ子さんが言う。ぼくは、がくがくする歯をくいしばって歩いていた。

「なくんじゃない。」

「なくんじゃない。」

まさ子さんは、前を向いたまま、いくたびもくりかえして言った。

やっと、おじさんのうちのかどまでたどり着いた。すると、まさ子さんが言った。

「さあうちに着いた。しげるさん。もうないてもいいよ。」

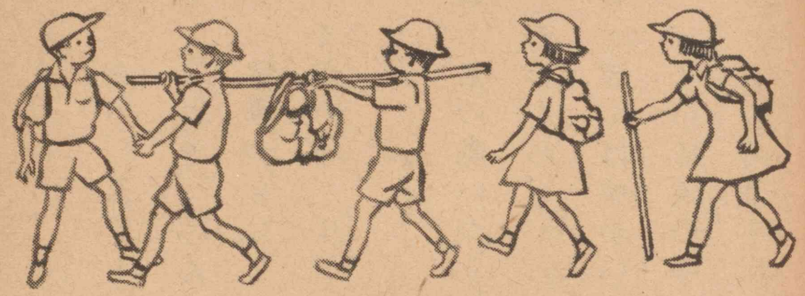
ぼくは、はりつめていた力がきゅうにぬけたような気がして、

「わあっ。」

と大声でなきだしてしまった。

うちにはいると、まさ子さんと、のりおくんがその話をしたものだから、みんなのわらいものにされてしまった。よわむしでないたのではない。まさ子さんのことばにひきずられてないたのだと言いたかったけれども、その時は、どうしても言い出すことはできなかった。

今でもおじさんがおいでになると、「しげるくんは、もうないてもいいと言われて、ないたことがあったね」。と、からかわれることがあるので、はずかしくなってしまう。



（四）　四年生になってから

A　あつ子
S　しげる

A　四年生になってから、いちばん楽しかった思い出はなあに？

S　それは、夏休みの遠足さ。ほら、たま川の上流へいって、みんなでみそしるを作ってたべたろう。あれだよ。

A　そうそう。あの時は、ほんとうに楽しかったわ。めいめい、みそだの、野菜だの、食器など

を持ってさ。

S　なべ、スプーン、やかんもね。

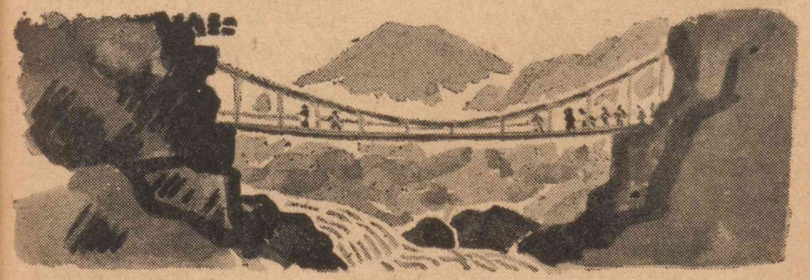
A　それを、みんなで手わけして持っていったわね。

S　電車からおりて川原まで、ガチャガチャ、ガチャガチャ、リックサックの中では音楽をしていたよ。

A　あの高いつり橋、ゆらゆらゆれて、わたしこわかったわ。

S　ぼくはゆかいだったよ。青い顔をして、こわがっている人の手をひいてわたしてあげたのだから。

A　あの時はうれしかったわ。



S　ごはんの時も楽しかったなあ。たきぎを拾う人。かまどを作る人というように、めいめいのはんで、手わけをしてやったね。

A　わたしは野菜をきざむ役だったわ。あなたは？

S　ぼくはかまど作りさ。大きな石を拾ってきて、かまどを作った。はじめは広すぎて、なべが地面についてしまうし、作りなおしたら、今度はせますぎたりしてね。むずかしいものだね。かまどの作り方は。

A　あなたのはんでは、なべをひっくりかえして、みそしるをこぼしてしまったわね。

S　うん。だけど二度めにはすばらしくできたんだよ。

A　どのはんも、競争で火をおこしたっけ。せんすでばたばたあおいで。

S　けむくて、ぽろぽろなみだが出てしまった。

A　わたしたちは、川のはしの方に石でかこいを作ったの。そしてトマトをひやしておいたのよ。

S　グツグツ、みそしるがにえたった時は、みんな喜んで、おどりだしてしまった。

まるくわを作って、川原にこしをおろしてさ、すんだ流れや、つり橋をながめながら、ごはん

をたべたね。

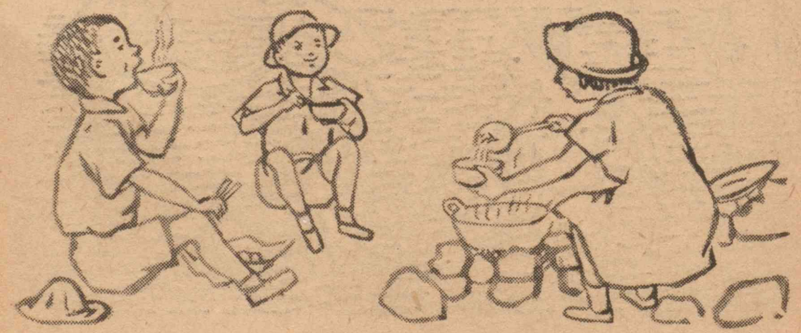
A　自分たちで作ったものって、とてもおいしいのね。わたし、三ばいもみそしるのおかわりをしたわ。

S　ぼくは、四はいだよ。

A　まさおさんときたら、「このはんのできはどうだい。」なんて言って、先生のまねをして、たべに来るのよ。

S　ごはんがすんで、ひと休みして、水泳。うれしかったなあ。

A　あの川の水は、とても冷たかったわね。でも、



いい気持だったわ。

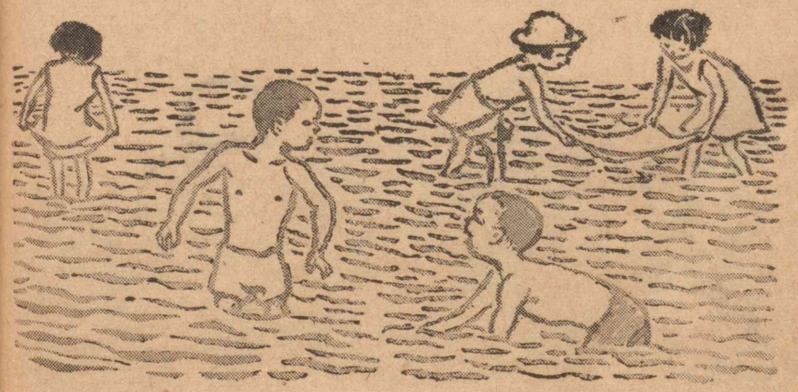
S　谷川の水が集まって来るからだろうね、冷たいのは。

水の中で目を開いたら、川底の石がもようのようにきれいだった。そして、小さい魚がつうんつうんと泳いでいたよ。

A　わたしたち、手ぬぐいで魚をすくったの。五ひきだったか、六ぴきだったか取れたわ。

S　ぼくたちは、つり橋の下まで泳いでいったよ。

A　ことしも、夏休みになったら、いきたいわ。



S　ぼくも、いきたいな。

六、たんけんたい

(一) 川をのぼる

よほどの日かげでないと、もう雪は見られません。

三月のある日、学校からの帰り道、まさおはとしおと、小川の岸で、めだかのぎょうれつを見ていました。

「としおくん、この川でまた遊べるね。

「しじみとりをやろうね」。

まさおは小石をチャプンと投げこんで、去年のことを思い出しています。としおはさざぶねを作ってうかべました。いきおいよく流れていきます。それを追いぬくように、小さな女の子のげたが、かたほうだけ流れていきます。

いったい、どこから流れてきて、どこへいくのでしょう。

「この川は、どの辺がもとなんだろうね」。

「さあ、けんとうがつかないな。ぼくはにいさんと、つりにいく時も、そんなに遠いところまではいかないし」。

「としおくん、のぼっていってみようか」。

「たけしくんもさそって、今度の日曜日にいこうか」。

「三人でいこう」。
「じゃ、これから三人で相談しようか」。
「さんせい。ぼくの家に、たけしくんと来ないかい」。
「三時ごろいくよ。そして、たんけんたいを作ろうよ。まさおくんがたんけんたい長だな」。
「なかよしたんけんたいだね」。
まさおととしおは、いそいで家に帰りました。

「どうしても時計がいるね」。
三人そろって、相談を始めました。たけしが時計のことをしきりに心配しています。
「うで時計はないし」。
「じゃ、目ざまし時計を持っていこうか」。
と、としおが、言いだしました。それで時計のことはすみました。
今度は、この辺の地図がほしいということになりましたが、これはどうにもなりませんでした。
「まあ十一時ごろまで歩いて、あとはひきかえすんだね」。
と、たんけんたい長がきめました。
「ぼくは、つりざおを持っていこうかな」。

「たけしくんはつりがすきだからな。でも、つりをやっているひまなんかないよ」。
「まさおくん、ぼくは写生帳を持っていきたいなあ」。
「ちょっとスケッチをするくらいならね」。
たんけんたい長は、少しでも時間があったら、どんどん、川をのぼってみたいと考えておりました。
としおが、記録係、
たけしが、時計係ときめました。
その日は、九時までに、学校の下の土橋のところに集まることにしました。
「なにか、もう相談しておくことはないかね」。

「しょくりょうはどうしようか」。
「おべんたうだけにしようよ」。
「ぼくのポチ、連れていっていいかい」。
としおのうちでは、かわいい小いぬをかっています。
「それはおもしろいな」。
「さんせい」。
ポチも、元気な、なかよしたんけんたいのなかまに入れてもらうことになりました。
春風が、さざなみを立ててはしり過ぎます。
ねこやなぎは、ふっくらとした銀色の花をつけています。
冬はもう去ったのだと、しみじみ思わせるような日です。

どんどん、川をさかのぼっていく、三人。そのあとからポチがついていきます。

まもなく、川が二つに分かれているところに出ました。どっちにしようかと話し合っています。なかなかきまりそうもありません。

たけしのふろしきの中からは、カッチン、カッチンと、目ざまし時計の音がきこえてきます。

いよいよ、川はばの広い方にいってみようと、いうことになりました。

ポチは、たんぼの中にはいったり、かれあしの中にはいったり、いかにもいそがしそうです。

水の音がはげしくきこえて

きました。川は小さなたきになって落ちていました。

「ちょっと、休もうよ」。

「九時三十分です」。

「このたきに、なんと名をつけようか」。

「そうだね、なにがいいかな」。

「ナイヤガラ」。

「九時三十分」。

「四年生」。

「どうも、いいのがないね」。

「そうだ、あの土橋のところから、三十分たったから、――三十分のたきとよぶことにしたら、どうだろう」。

「さんせい」

三十分のたきのところで十分も休んでしまいました。

むこう岸の、水面すれすれのところに、からすうりが一つ、色もあざやかに残っているのが見えました。

さきほど、問題になった二つに分かれた流れが、一つになっているところに出ました。ふりかえってみると、この小川が、わかれたり、また集まったりしながら、たくさんの田をうるおして、注いでいるのだということがよくわかりました。石橋のところに出ました。

おひゃくしょうさんが、青い葉をあらっていました。

「ちょっと、はいってみようか」。

たけしはくつをぬぎかけています。

「じゃ、少しね」。

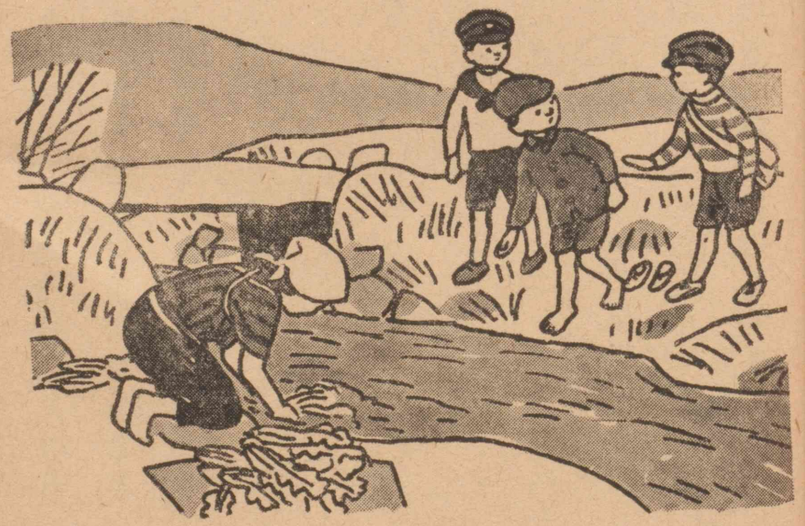
三人は、思ったより、水がぬるんでいたので、おどろいてしまいました。

水草のみどりがきれいです。川は、ぶつぶつ、ひとりごとを言って流れているようです。

「おい、出かけようよ」。

「あ、もう十時だ」。

「急ごう」。



なかなか、川はばはせまくなりません。ぐっと広くなっているところもあります。

「つりをやっているよ」。

「ちょっと、見ようかな」。

「また、ちょっとか」。

「ぼくも、つってみたいな」。

おじさんはだまって、つっています。見ているうちに小さなたなごがつりあげられました。にじのようにきれいな色のたなごです。

つり糸をたれると、すうっと、魚がよってくるのが、よく見えます。やっぱりおじさんは、だまってつっています。

「おい、出かけよう」。

「少しつかれたね」。

ポチがきゅうにほえたてました。

「なんだい」。

「あっ、ほら」。

むこう岸のやぶの中に、おもしろい顔をしたいたちが、ちらっと、こちらを見て、すうっとあなにはいってしまいました。三人は、だんだん、ほんとうのたんけんたいになったような気になってきました。ジャングルをかき分け、もうじゅうの住むところへ進んでいき

ます。まもなく、ものすごいもうじゅうが、ゆく手をさえぎっているところに出ました。

「こわいな。」

「どいてくれそうもないよ。」

「通れないね。」

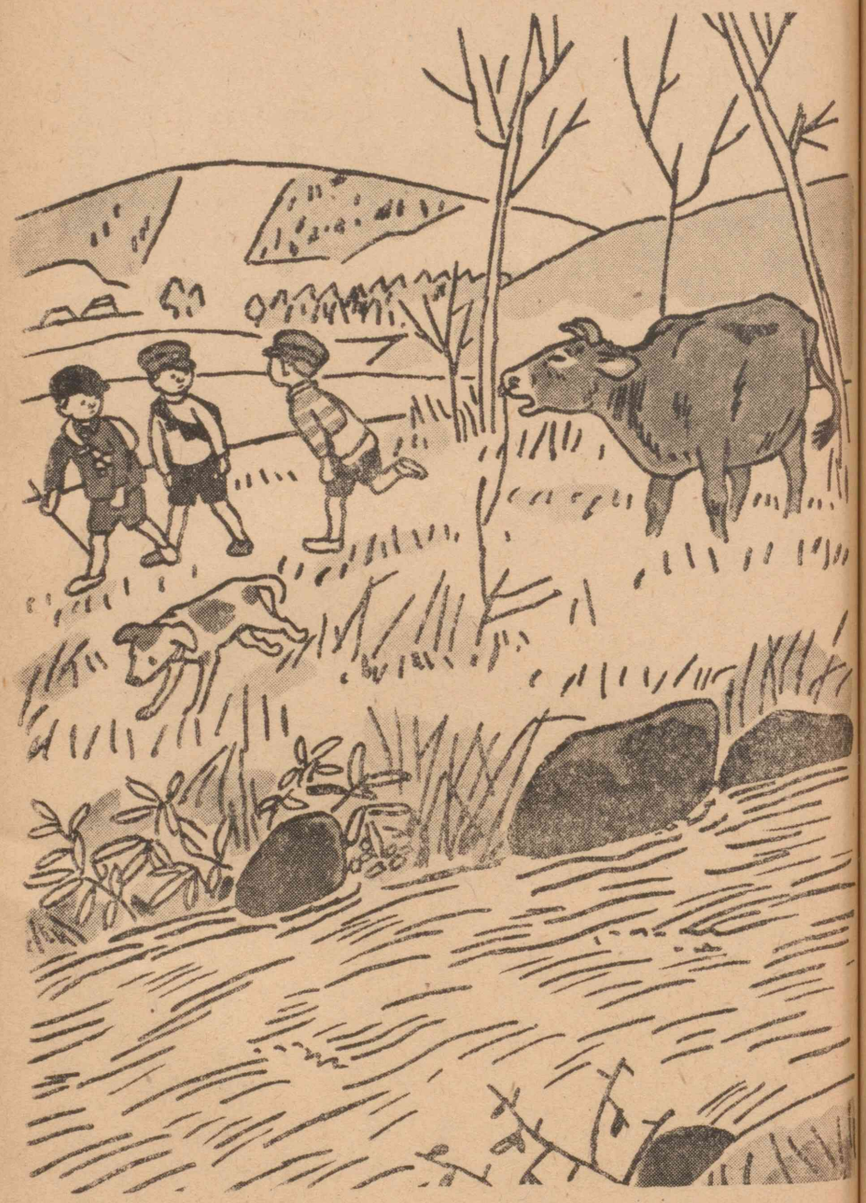
「しかたがない。たんぼのあぜをまわろうか。」

「ポチがあんまりほえると、もうじゅうもあばれだすよ。」

「だいじょうぶだよ。ぼくがよしよしと言って、なだめておくから、その間に、そっと通れよ。」

たんけんたい長が近づいていくと、とつぜん、

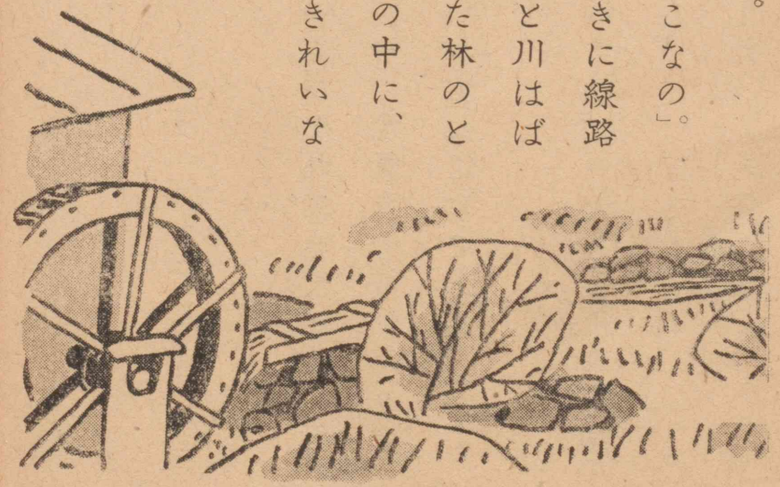
「モー。」



と、大きな声を出して、ぎょろりとにらみつけました。
「キャッ」。
たんけんたい長もあわててにげて来ました。しかたがないから、田のあぜをまわって、いくことにしました。
うしは、のんきそうに、しっぽをぶらりぶらりさせながら、草をたべていました。
「ああ、こわかった」。
「少し休もうよ」。
「なかよしたんけんたいが、よわむしたんけんたいになってしまったね」。
「十時四十分」。

「もう、そんなになったのかな」。
「おなかがすいたね。おべんとうにしようか」。
「まだ早いよ」。
「もう少し、のぼってみよう」。
川はさっぱり、せまくなりません。だいぶつかれてきました。元気なのは、ポチと目ざまし時計です。もう一つ元気なものがいます。それは川でした。つかれを知らないで、いつもにこにこわらっているようにも見えました。
水車小屋がありました。川の流れをひいてきて、大きな水車を回わしているのです。中をのぞいてみました。
ドスン、ドスンと米をついているのでした。

めずらしがってしばらく見ていました。
「おじさん、この川のいちばんもとはどこなの」。
「これから一時間もかかるかな。このさきに線路と交わる所がある。その辺から、ぐっと川はばがせまくなってくる。こんもりしげった林のところが見える。そこなんだよ。その林の中に、きれいな池があって、そりゃ、とてもきれいな水がこんこんとわいているんだよ」。
「一時間ほどなら、いってみようか」。
「でも、もう十一時過ぎているよ」。
「この次にしようよ」。



「これで、たんけんはうちきりか」。
三人は草原のどてにこしをおろしました。もう、つくしやすみれが、顔を出すことでしょう。川の流れに、春のやわらかい雲がうつっています。三人のおべんとうをたべている顔もうつっています。
目ざまし時計は、あいかわらず、カッチン、カッチンと元気な音をたてていました。

(二) 先生の話

あくる日、たんけんたいのことを先生にお話したら、すぐ地図を出して見せてくださいました。

「ここが三十分のたきかな。」

「石橋のところだ。」

「もうじゅうは、この辺にいたのかな。」

「水車小屋があったね。」

「線路。」

「なるほど、もうすぐだったね。」

こんどは、この地図をたよりに、川を下ってみたらおもしろいと思いました。八キロメートルほど下れば、大川に出ることもよくわかりました。

「きみたちは、きのうのことを、これからもたびたび思い出すことだろう。川のみなもとをたずねていったわけではないが、先生にもわすれられない思い出がある。」

と、話してくださいました。

今から十年も前のことだが、友だちとふたりで旅に出た。次の日に登ろうとする山のふもとの家にとまった。そのばんは、おそろしいかみなりでね。いなずまの光が昼のように明かるかった。あくる

日は、すばらしい天気でね。そばの花が、ことにめだった。先生たちはちゃんと、地図を見ながら登っていったんだが、うまくいかないんだよ。

この辺に大きな木があるはずなのにと思っても、そんな木は切りたおされていたり、こまったよ。まあ、登る時は、なんとか登ったが、下る時に、すっかり道がわからなくなってしまった。だんだん日が落ちていくので、ずいぶん気をもんだ。そのうちに、こけのはえた大きな木がたおれていたり、石がごろごろしているところに出た。どうも雨でもふれば、水が集まって流れ出すようなところだったので、ここにそっていけば、川へ出られるし、そしたら、道もわかるだろうと思った。歩いているうちに、だんだん深い谷にはいっ

ていくような気持になる。もしも、あの石が落ちて来たら、たいへんだ。こんなに深くなっては、登れなくなるかも知れないと思って、またはいあがっていった。ふたりでぼんやりしていると、すぐ近くに道があるじゃないか。うれしかったね。

これも数年前の話だ。山登りがすきで、ふたりで出かけた。その辺はすごいくまざさがはえているところで、人間が通らないようなところだった。そのくまざさはおとなのせいよりも高いのだね。ふたりで、はなれちゃいけないと思って、ときどきよびあって、ガサガサ、歩いていた。かみなりが落ちたために、大きな木がたおれている。その上を歩かなければならないこともあった。すべってころんで、すいとうのふたを落としてしまったことをおぼえている。

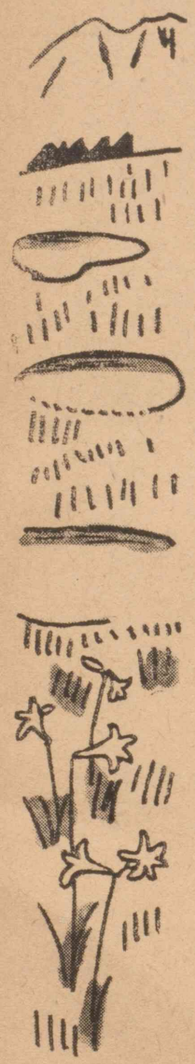
なかなか、このやぶから出られないから、ふたりで相談して、じしゃくをたよりに、しゃにむに、北に出ようということになった。

きみたちが、川の分かれている所に立って、どっちにしようかと、

まよっている時のようなものだね。

ところが、思ったより、早く出られて、とてもうれしかった。そこが、じくじくしめっている草原で、そのなかには、たくさんの水たまりがある。大きいものでも、たたみ四じょうくらいだった。黄色い花がいっぱいさいていた。

その水たまりから、きりがたち、すうっと飛んでいく。向こうからも飛んで来る。気持が悪いほど美しかった。ここが、下の大きな川のみなもとだと、あとで聞いたよ。



七、ことばと文字

(一) とし子さんの研究（あかちゃんと、おうむのことば）

わたしの家では、小鳥をたくさんかっています。その中でも、おうむは人気者です。「オハヨウ」。「コンニチワ」。「オジサーン」。など、いくつかのことばを覚えています。

もうひとりの人気者は、妹のみよ子です。生まれて一年と少したちました。このごろ、やっとことばが言えるようになりました。おかあさんを見ると、「うまうま」と言います。おちちがほしい時

も、「うまうま」と言います。おかあさんがおちちをのませる時、「うまうまをあげましょう」と言うのを覚えたのです。

そのほか、いぬは「ワンワン」小鳥は「ピヨピヨ」自動車は「ブーブー」などと言います。なき声や音で、そのものの名まえにしているようです。

わたしは、あかちゃんとおうむとはことばが同じようなものだとぼんやり考えていました。

ところが、このあいだ、お客様が来て話をしていらっしゃると、とつぜん「オハヨウ」という声がしました。家の人はわかっていますから、平気でしたが、お客様はおどろいたように、きょろきょろ見まわしていらっしゃいます。おとうさんが、

「あれですよ。」

と、おうむを指さされたので、大わらいになりました。これは夕方のことでした。

あかちゃんもおうむも、まねをして話すということはたいへん似ています。けれどもあかちゃんは、小鳥を「ワンワン」と言ったり、いぬを「ピヨピヨ」とよんだりはしません。思ったことを話します。おうむは、考えて話すとは思われ

ません。これではほんとうのことばとはいえないでしょう。

あかちゃんは、小さくても、やはり人間だと思いました。

(二) ある夜の話

ちく音器　「きょうは、久しぶりに子どもたちがぼくと遊んでくれてうれしかったなあ。」

電　話　「ちく音器くんかい。つかれたろうね。」

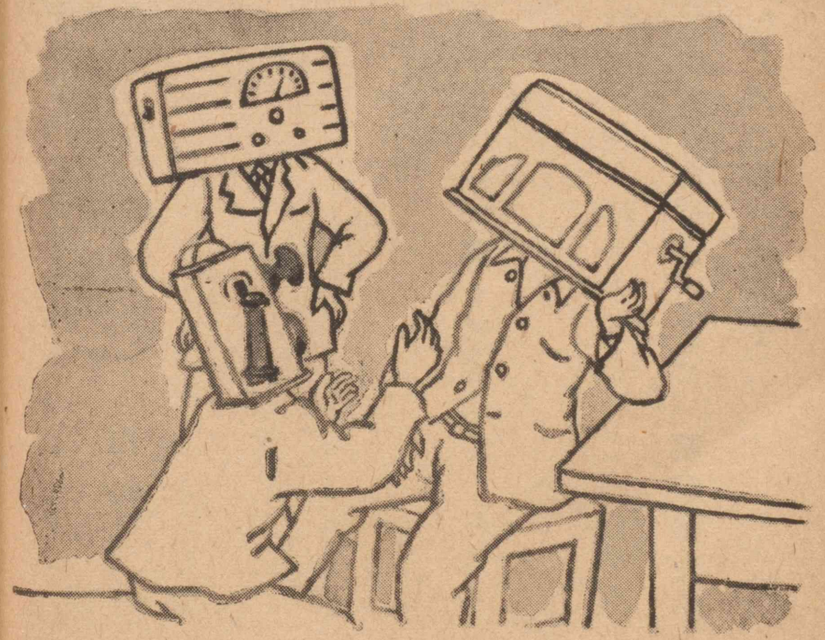
ちく音器　「うん、とつぜん引っぱり出されたかと思うと、頭がいたいほどねじをまかれて、目をまわすところだったよ。」

電　話「ぼくは、いつ起こされるかわからないので、ゆっくり休むひまもない」。

ちく音器「そうだろうね。ま夜中にきみが起こされる音を聞くと、ほんとうにたいへんだと思うよ」。

ラジオ「だれだい。静かにしてくれないか。ぼくは一日中働いて、つかれきっているんだ」。

電　話「あ、ラジオくんか。ご



めん、ごめん。ついたいくつなものだから」。

ラジオ「たいくつだって、うらやましいなあ」。

電　話「ラジオくんはまったくいそがしいからね」。

ラジオ「それこそ聞いてくれるのかどうだか、わからないのに、しゃべり通しでやりきれないよ。でも、子どもたちが待っていて聞いてくれる時などは、うれしくなって、つかれもわすれてしまうね。ところで、電話くんの楽しみはどんなこと」。

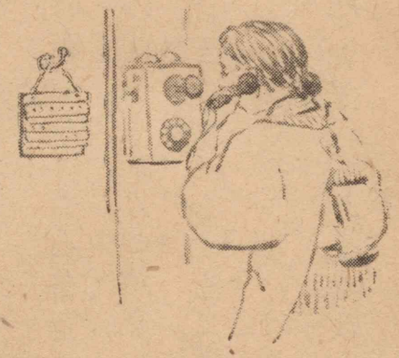
電　話「この前、ほら、あのぼっちゃんが病気になったことがあったろう。あの時、ぼくがお医者さんをよんであげたんだ。『うんうん』うなっていたのが、ひとばんのうちにけろりとなおったのには、おどろいたり、喜んだりさ。あんな時はうれしいね」。

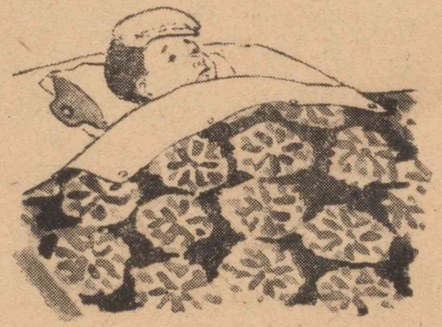
ラジオ「そうだったね。あんな時、ぼくでは役にたたないな」

ちく音器「ぼくは、きょうみたいに、ぼくの歌に合わせて、子どもたちがうたったり、おどったりしてくれる時がうれしいね」。

ラジオ「でも、いやなこともあるね」。

電話「うん。あわてたりしてはっきり話さない人がいるね。それで、『この電話だめだ』なんて、ガチャンと切られる時は、なんとも言えないいやな気がするよ」。





ちく音器「ぼくは、あまり強くねじをまかれると、頭がいたくなるんだ。助手のレコードくんが、いたずらっ子にわられたりするのもいやな気持だね」。

ラジオ「ぼくらみたいに役にたつものを、だいじに使ってくれないなんて。今の人間たちは、ぼくらがいなかったら、どんなに不便だか考えてないんだよ」。

電話「そうだよ。ぼくの先祖は七十年ほど前に生まれたのだが、その時なんか、めずらしくて大さわぎしたそうだ」。

ちく音器「ぼくの先祖も同じころに生まれたんだよ。ものを言う機械なんて、うそにちがいないって、みんながほんとうにしないほど、ふしぎがられたらしい」。

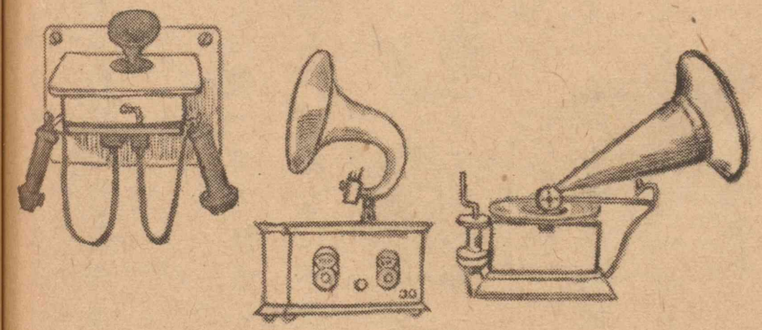
ラジオ　「ぼくの先祖は四十年ほど前の生まれだから、いちばん新しいけれど、ぼくらは、今は世界中にいきわたっているよ。」

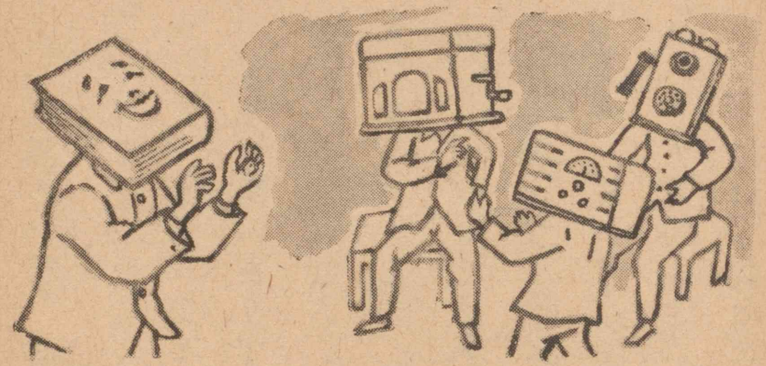
電　話　「ぼくらは、みんなすばらしい文明の利器というわけさ。」

ちく音器　「あとあとまで、話や音楽を残したり――」。

ラジオ　「どんな遠い所でも、それを聞かせてやったり――」。

電　話　「だいじな用をたしたり――ぼくらほど便利なものはないね。」





本　「あっはっはっ」。

ちく音器　「だれだい。わらったのは」。

本　「ぼくだよ」。

ラジオ　「なあんだ、きみか。何がおかしいんだい。ばかにしたわらいかたをするなんて、しっけいだよ」。

本　「ごめん、ごめん。話を聞いていたら、おもしろく、またおかしくなったもんだから、ついね」。

電　話　「おかしくなったって」。

本　「いや、だんだんわかるよ。きみたちは、

『文明の利器』だとか言ったようだが、どんな仕事をしているんだね」。

ラジオ「さあ、ひとまとめに言うと、人間がいろいろの考えを言ったり、聞いたりするのに役だっていると思うね」。

本「それなら、ぼくもなかまに入れてもらいたいな」。

電話「どうして、きみが」。

本「ぼくはきみたちと少しちがうんだよ。声や音のかわりに文字を持っているんだ」

ちく音器「それで、どうして——」。

本「きみたちの先祖が生まれたときの話をいちばんよく知っているのは、実はぼくらなんだ。そのころの人間が、消えない文字

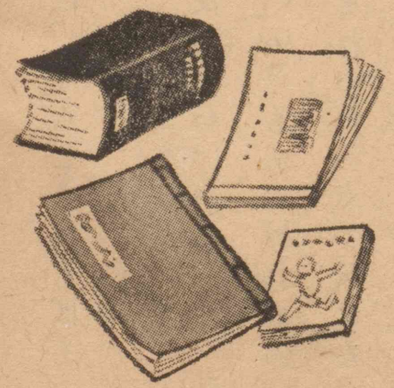
で、しっかり書いておいてくれたんだもの」。

電話「いったい、きみたちはいつごろ世の中に出て来たの」。

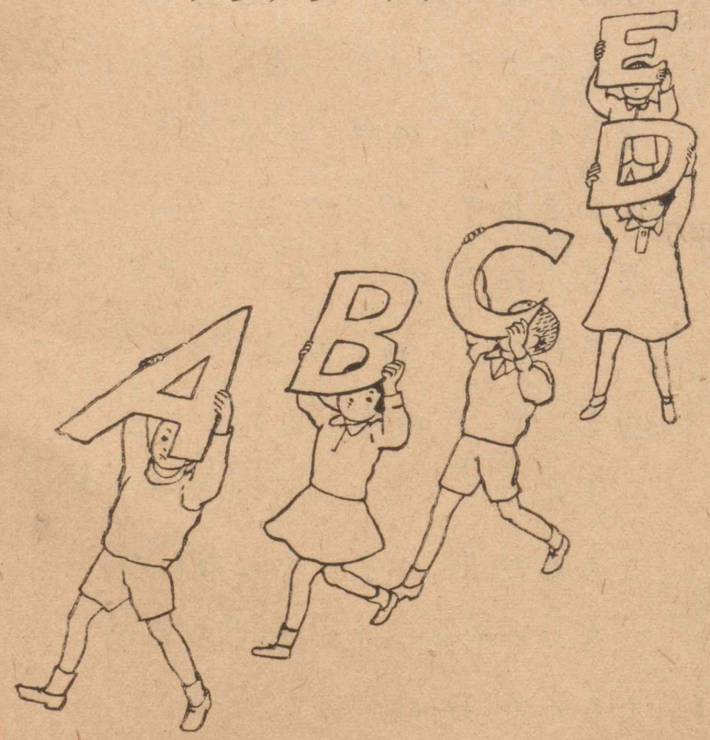
本「ぼくらの先祖は、いつごろ、だれが作ってくれたのかわからない。それほど古いんだ。だから、きみたちの先祖のころよりも、もっと前のことを知っている。役にたつと言えば、ぼくらの方が古くからあって、長い間役にたってきたんだよ」。

ラジオ「おどろいたなあ。きみはだまっていておとなしいから、そんなこととは知らなかったよ」。

本「そう言われると、ぼくもはずかしいよ。実のところ、ぼくはおしのように、人



はまべにひとつ　ほかけぶね
ならんだ M の字　まみむめも
みこしもめもめ　むらまつり
ならんだ Y の字　やいゆえよ
やまゆり　しらゆり　よいにおい
ならんだ R は　らりるれろ
ゆらゆら　ゆれてる　しろけむり



間のために声や音は出せないんだ。この点は、なんとしてもぼくの負けだ。」

電話「そうすると、今では、ぼくらの方が便利なわけかい。」

本「そうばかりも言えないね。みんな、いい点もあるけれど、ぐあいの悪い点もあるんだ。そして、それぞれのいい点で役にたっているわけさ。さっきはわらったりしてごめんね。長いおしゃべりをしてしまった。では、おやすみなさい。」

(2)

Aの字がならんだ　上のだん

あさひがあかいな　あかさたな

からすがカアカア　またないた

Iの字がならんだ　二だんめに

いきましょ　ちかくの　いきしちに

のはらに　たのしい　にちようび

Uの字がならんだ　三だんめ

うぐいすなきます　うくすつぬ

つるべをくんでも　まだやまぬ

A KA SA TA NA HA MA

I KI SI TI NI HI MI

U KU SU TU NU HU MU

Eの字がならんだ　四だんめに

えんがわ　ひがてる　えけせてね

みけねこねている　せがまるい

Oの字がならんだ　下のだん

おもてへ　そとへ　おこそとの

こどもはかぜのこ　とんでいけ

E KE SE TE NE HE ME

O KO SO TO NO HO MO

(たてに見よう)

ひとりぼっちの　AIUEO

えのようにきれいな　あおいうみ

ならんだKの字　かきくけこ

かきねで　がまのこけくけくく—

ならんだSの字　さしすせそ

それひけ　せっせと　すをさして

ならんだTの字　たちつてと

トルコのへいたい　トテチテタ

ならんだNの字　なにぬねの

なにかねらった　ねこのめが

ならんだHは　はひふへほ

“ハナマサ”とは読めましたが，何のことかわかりません．その時，花たばをかかえた女の人が，その店から出て来ました．

“あ，わかった．ここお花屋さんよ．花屋のまさいちさんとか，まさきちさんとかいうわけなのよ．”

まさえさんがとくいになって言いました．見ると，店の中には，色とりどりの花が美しくかざられてありました．

次のは，“TAKASE”の下に“NAKATYO”と書いてありました．

“‘タカセ’は店の名まえでしょう．‘ナカチョー’というのは何かしら．”

今度はまさえさんが聞きました．

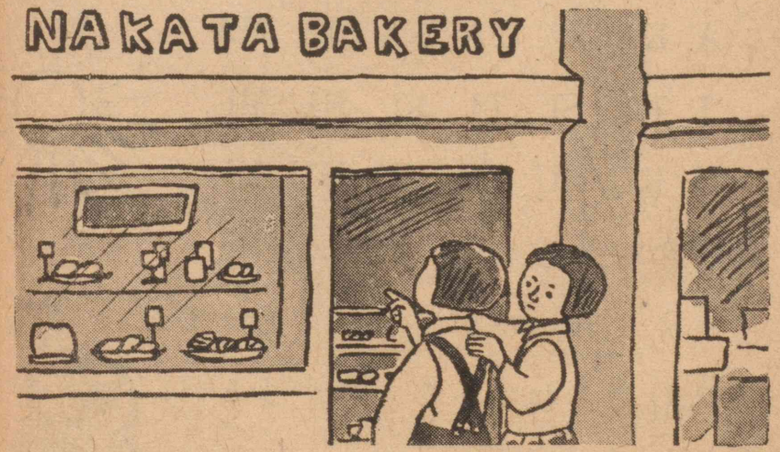
“‘ナカチョウ’でしょう．ここ，中町なのよ．本町にも，‘タカセ’という運動具屋があるわ．”

また少しいくと，パン屋のガラス戸に，“NAKATA BAKERY”と書いたのがありました．

“まさえさん，ナカタ バケ…… あと何て読むの．”

とし子さんにもわかりません．あした，先生にお聞きすることにしました．

そのほかにも，読めないのがいくつかありました．読めたのは，たいてい店の名まえや場所の名まえでした．



○身のまわりの物についている，ローマ字を読んでみよう．

（三）ローマ字を読もう

（1）

とし子さんたちは四年生になってから，ローマ字を勉強しています．もう，ずいぶん読めるようになりました．

二三日前のことでした．町かどの洋品店のガラス戸に，“HUZIYA”と書いてあるのが，目につきました．HU, ZI, YA, ときれぎれに読めました．“HUZIYA”“HUZIYA”とくり返してみると，

それは，いつも言いなれている店の名まえです．なあんだというような気がしましたが，また，なぞがとけたようなゆかいさもありました．

きょう，学校の帰りに，とし子さんはまさえさんと，店のかんばんや広告などに書いてあるローマ字を読みあいました．

学校のすぐ前の文ぼう具屋には“MARUYA”と書いてありました．ふたりは口々に読みました．

“MARUYA”“MARUYA”

“やっぱり店の名まえね．,,

すこし歩くと，“HANAMASA”というのがありました．

“HA”“NA”“MA”“SA”

“‘HANAMASA’ってなあに．”

まさえさんが聞きました．とし子さんも，

2　ある夜の話

(イ)　わたしたちのことばや声を伝えるどうぐには，どんなものがありますか。

(1)　　(2)　　(3)　　(4)

(ロ)　この四つの中で，いちばん遠くまで声を伝えてくれるものは何ですか。

(ハ)　この四つの中で，人のことばを，いつまでも残してくれるものは何ですか。

(ニ)　電話にとっていやなことは何ですか。

(ホ)　ちく音器のいやなことは何ですか。

(ヘ)　ラジオのいやなことは何ですか。

3　ローマ字を読もう。

(イ)　とし子さんたちが，町でひろったローマ字には，どんなものがありますか。

(1)

(2)

(3)

(4)

(ロ)　読めなかったのがありますね。あなたも調べてごらんなさい。

(ハ)　あなたも町に出たら，ローマ字をひろってごらんなさい。

(ニ)　あなたの身のまわりの品物などにローマ字はありませんか。調べて記録してごらんなさい。

(ホ)　次のローマ字を読んでごらんなさい。

Tôkyô,　nêsan,　dempô,　Simbun,

Kitte,　gakkô,　Nippon Ginkô

(ヘ)　ローマ字五十音図を書きなさい。

(ト)　五十音図の文字のならび方，組み合わせ方を見ていると，おもしろいことがわかるでしょう。わかったことを書きなさい。

3　もうないてもいい

(イ)　しげるくんは"もうないてもいい"と言われて，どうしてないてしまったのですか。

(ロ)　冬の思い出を作文にかきましょう。

(ハ)　一年生のころを思い出して，みんなで話しあいましょう。

4　四年生になってから

(イ)　四年生になってからの，いちばん楽しい思い出は何ですか。

(ロ)　遠足にいって，どんなことをしましたか。

(ハ)　この文は，あつ子さんとしげるくんが，えんぴつで話しあいをしたものです。わたしたちもやってみましょう。

(1)　はじめに話しあいの問題をきめましょう。たとえば，

○えいが"風の子"を見ての感想

○勉強のしかたについての意見

○このごろのぼくたちの組についてのはんせい。

(2)　どちらが先に書くかきめる。

○人が書いている間は，自習をする。

六　たんけんたい

1　川をのぼる

(イ)　たんけんたいは，だれだれですか。

(ロ)　三人が相談のすえ，きめたことはどんなことですか。

(1)　持っていくもの

(2)　係

(ハ)　たんけんたいがのぼっていった川のようすを絵にかいてごらんなさい。

(ニ)　あなたも，これに似たことをやったことはありませんか。あったら書いてごらんなさい。またお友だちと話しあってごらんなさい。

2　先生の話

(イ)　先生のお話の一

ここにそっていけば，道に出られるとなぜ思ったのでしょう。

(ロ)　先生のお話の二

まよいこんだやぶから出るために，どんな相談をしましたか。

(ハ)　川をのぼるお話と，先生のお話とにはどんなつながりがありますか。

(ニ)　たんけんものがたりを読んでみましょう。

(1)　先生に，おもしろいたんけんものがたりの本をしょうかいしていただきなさい。

(2)　お友だちどうしで，おたがいにしょうかいしあって読みましょう。

七　ことばと文字

1　とし子さんの研究

(イ)　おうむとあかちゃんのことばは，どこがちがうのですか。

(ロ)　おうむのことばは，ほんとうのことばとはいえないでしょうか。

(ハ)　おや鳥は"こっこっ"とひよこをよんだり，いぬが来ると，"けけけ"と鳴いてあいずをします。これもやはり，ほんとうのことばだといえないのでしょうか。

○　みんなで考えて見ましょう。

本の名まえ	
ページ数	
作　　者	
あらすじ	
感　　想	
しょうかい者	

四　げき　　—友だち—

(イ)　このげきのすじを話してごらんなさい。(また,書いてごらんなさい。)

(ロ)　みゆきさんは，どんな子どもだと思いますか。

(ハ)　まり子さんは，どんな子どもだと思いますか。(みゆきさんとくらべてごらんなさい。)

(ニ)　としおさんを，どう思いますか。

(ホ)　このげきのつづきを書いてごらんなさい。

(ヘ)　みんなで演出をしてみましょう。

(ト)　演出をしてみて，ことばや動作で悪いところがあったら，書きなおしましょう。

五　思い出

ここには思い出を集めてみました。思い出というものはうれしいものですね。うれしかったことはもちろん，つらかったこと，かなしかったこともなつかしく思い出されるものですね。あなたがたも，小さいころの思い出を作文にかいてみるとおもしろいでしょう。

1　秋の日

(イ)　これは思い出全べんの，前そう曲ともいうべきものです。北原白秋という方の作品です。

(ロ)　この詩が"思い出"をうたったものだということはどうしてわかりますか。

(ハ)　一節ごとに，思い出に残るものがはいっていますね。それは何何でしょうか。

(ニ)　それらのことばから，この詩はどんな時，どんなところへいった思い出かを話しあってみましょう。

(ホ)　"秋の日"という題ですが，秋の日らしい感じを表すことばはどこにありますか。

2　小さいころ

(イ)　この文はどんな時に読む文ですか。

(ロ)　としおさんは，生まれたころどんなあかちゃんでしたか。

(ハ)　四つの時のお話はどんなお話ですか。

(ニ)　六つの時のお話はどんなお話ですか。

(ホ)　あなたにも小さい時の思い出があるでしょう。それをノートに書いてごらんなさい。

(イ) あなたが読書会のけいかくをたてるとしたら，どんなプログラムを作りますか。こころみに作ってごらんなさい。

(ロ) 読書調べのグラフを見て，思ったことを書きなさい。

○

○

(ハ) クモ，ウミ，ハナ，ハシ，カキ，サケ，カウ，フク，キ，エなどのことばを，あなたは，どう発音するか調べてごらんなさい。そして関東や関西のことばとくらべてみましょう。

○ あなたのクラスにも学級文庫がありますか。もしあったら，この子供たちのように，いろいろくふうしておもしろく読書の勉強をしましょう。

学級文庫がない場あいは，本を集めるほうほうについて相談しましょう。

三 雪来る前の高原の話

(イ) このお話には，人間はひとりしか出て来ません。そのかわりに，こう物や，しょく物や，こんちゅうや，どうぐなどがあらわれます。よく読んで，どんなものが出てくるか書いてごらんなさい。

(1) (2) (3)

(4) (5) (6)

(ロ) (1)の言ったことばをノートに書きなさい。

(2)の言ったことばをノートに書きなさい。

(3)の言ったことばをノートに書きなさい。

(4)の言ったことばをノートに書きなさい。

(5)の言ったことばをノートに書きなさい。

(6)の言ったことばをノートに書きなさい。

(ハ) あなたは，つたの葉が人間だとしたら，どんな人だと思いますか。あなたの考えをノートに書きなさい。

(ニ) あなたは，すぎの木が人間だとしたら，どんな人だと思いますか。あなたの考えをノートに書きなさい。

(ホ) あなたは，くぎが人間だったら，どんな人だと思いますか。あなたの考えをノートに書きなさい。

(ヘ) 次のことばを使って，みじかい文を作りなさい。

(1) なにひとつ

(2) ふいに

(3) なんとなく

(4) これしきの

(5) すさまじい

(6) するどい

(7) あざわらう

(8) ほこり顔

(9) あやういところ

(10) やがて

(ト) 学級文庫や学校図書館で童話を読みましょう。

(1) よい童話の本があったら，お友だちにしょうかいしましょう。そのためには，発表の時間を作ることもいいでしょうし紙きれに次のようなことを書いて，かべにはることもいいですね。

学習のてびき

一　秋のうた

○　次のようなじゅんじょで勉強しましょう。

(イ)　正しい読みかたに気をつけ，わけを考えながら読みなさい。

(ロ)　くりかえして読みながら，この詩の気持や，えがかれている場面をくわしく考えてみなさい。

(ハ)　詩を全部，ノートに書きなさい。

(ニ)　声を出して読みながら，詩の気持やちょうしが読み表わせるようにどりょくしましょう。

1　まきばのさくに

(イ)　この詩を作った人は，まきばのさくにこしかけて，何をしているのですか。

(ロ)　この人は広い世界のことや，火星のことや，地球のことや，海のことや，子うしのことや，むかしのことなどについて，どんなふうに考えているのか，そうぞうしてごらんなさい。

2　月

あなたが海の底にいて，月を見ていることにして，この詩の第一節を考えてごらんなさい。第二節や第三節を読む場あいもこのような心がまえがたいせつです。

3　しらかばの林

(イ)　ひとみというのはどこですか。

(ロ)　うまのひとみに，ちらりと何がうつったのですか。

4　おかの上から

この詩をよく読んだら，絵にかいてごらんなさい。

○　わたしの詩集1を作りましょう。

(イ)　洋紙を細長く二つに切って，それを二つにおってとじる。

(ロ)　表紙に絵を書いたり，詩集の名まえをつけたりする。もくじをつくり，ページを書きこむ。

(ハ)　詩を作ったら，つぎつぎに書きこむ。

○　わたしの詩集の中から，よい作品をえらんで，わたしたち（学級）の文集を作りましょう。

二　学級文庫

1　相談

(イ)　としおくんのクラスでは，学級文庫について，なにを相談するのですか。

(1)

(2)

(3)

(ロ)　ならべかたは，けっきょくどうすることにきまりましたか。

(ハ)　ほしい本は，どうすることにしましたか。

(ニ)　読書週間には，どんなことをすることにきまりましたか。

(1)

(2)

2　読書週間のポスター

(イ)　どのポスターがよいと思いますか。

(ロ)　絵だけよいと思うもの。

(ハ)　ことばだけよいと思うもの。

3　学級読書会

ほめはやし(す) 48
本だな 28

まきば 4
まけ 130
まさいち(さん)(18)
まさえ(さん) (17)
まさきち(さん)(18)
まじわる 111
まちかど (16)
まったく 122
まどろむ 43
ま夜中 122
マンガ 30

見いださなければ(す)51
みけねこ (20)
みずくさ 93
水(たまり) 117
みつ 45
みなもと 113
みぶるい 44
みゆき(さん) 58

むきあう 70
むしろ 39

めしあがって(る)62

もいだ(ぐ) 5
もめもめ (22)
森下(さん) 20
問題 17

やしなう 36
やね 81
やぶ 95
やまゆり (22)

ゆうかん 43
ゆらゆら 88
ゆりおこし(す) 47

よほど 94

りんどう 42

レール 38

労働者 52

わられたり(る) 124

かん字

底(6) 開(8) 童(8) 談(10) 集(10) 全(10)
部(10) 第(11) 週(12) 言(13) 図(14) 館(14)
反(14) 対(14) 社(15) 同(17) 次(17) 問(17)
題(17) 希(18) 望(18) 発(22) 委(22) 仕(23)
以(26) 清(28) 死(28) 参(30) 説(31) 古(34)
関(34) 低(34) 児(35) 味(35) 使(35) 歯(38)
語(39) 顔(41) 経(41) 験(41) 永(41) 久(41)
信(41) 安(42) 里(42) 戦(43) 常(45) 他(45)
共(45) 求(45) 熱(46) 季(46) 節(46) 起(47)
由(47) 悲(48) 周(49) 囲(49) 積(51) 適(51)
当(51) 殺(52) 結(55) 果(55) 配(55) 変(57)
助(68) 県(81) 根(81) 菜(87) 器(87) 争(90)
計(97) 帳(98) 録(98) 係(98) 面(102) 注(102)
路(110) 覚(118) 祖(125) 負(130) 品 16 告 17
具 17

かわりもの 77

きせつ 46
きょうだい 54
共同 45
清川(せい) 28
きよし(名) 64
ぎょろり 109
九しゅう 33
きり 117
(六)キログラム 76

空想 48
草川(さん) 20
くすり(とわらう)64
くもゆき 42

経験 41
げた 95
結果 55
けわしい 38

こいしがって(る)48
高原 28
こうてつ 54
ごうまん 56
午後 58
こごえしんで(ぬ)43
ことし 93
小ばち(虫) 43
こぼして(す) 90
ごま 75
米 111
ころして(す) 52

(つり)ざお 97
ささぶね 95
さしえ 8
さと 42
さびた(る) 54

詩 27
(子)じか 8
しじみとり 95
(四)じょう 117
しずえ(名) 27
しせい 26
しめって(る) 117
社会科 15
終日 49
しゅんかん 57
しらかば 7
しらゆり (22)
しろけむり (22)

水車ごや 110
すかさず 57
すする 83
すみび 77

世界一 62
石炭 38
せますぎたり(る)90
前後 57
先週 68

そそぐ 102
それこそ 123

たいして(す) 39
高野(せい) 27
田口(さん) 13
戦わなければ(う)49
だっ線 57
たどり着いた(く)84
楽しかった(い) 87
(花)たば (8)
たま川 87

たより(に) 117
だんだん(ばたけ)81

地図 97
ちゃんと 114

つくし 112
つくりかた(る) 90
つた 8
つっこんだ(む) 59
つめたい 92
つり(ばし) 88
積んで(む) 57

適当 51
デッキ 9
でぶ 76
てら 51
電話 121

とうふや 81
東北 33
読書会 22
読書週間 12
とばっちり 52
トマト 91
トルコ (21)
トロッコ 38
とんだ(まちがい)36

長崎(ながさき) 35
長野県(ながのけん) 81
名古屋(なごや) 34
なめて(る) 45
なやみ 53
なるたけ 40

にくらしい 63
にらみ 109

ねて 36

のはら 51
のりお(くん) 81
(二)ばい 91
(四)はい 91
はげましあった(う)68
はじ 90
はりつめて(る) 85
はん 89
はんの木 57
パン(屋) (19)
ひいて(く) 88
(五)ひき 93
ひきかえす 97
ひさしぶり 121
ひしょぬれ 63
ひそかに 6
ぴちぴち 78
ひっそり 28
ひとみ 7
ひねって(る) 66
ピノッキオ 27
ピョピョ 119
開いた(く) 92

ブーブー 119
深川(くん) 16
船木(せい) 28
不平 41
ぶらり 109
ふるす 48
文ぼう具店 (17)

ページ 32
返事 59
ほしがり(る) 77
ポスター 19

Copyright 1950, by
The Nihon Shinkyōiku Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国414

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします。

なお、諸規則および指示によりまして、漢字・かなづかいその他多少の修正をおわびいたします。

「まきばのさくに」……椎野　種彦
「月」「しらかばの林」「秋の日」……北原　白秋
「雪来る前の高原の話」……小川　未明

Approved by Ministry of Education
(Date　　1950)

国語八

編者
東京都大田区雪ケ谷町　清明学園内
財団法人 日本新教育研究会
理事長　濱野重郎
編集長　照井猪一郎

担当執筆者
成蹊学園小学校主事　滑川道夫
成城学園初等学校教諭　馬場正男
学習院初等科教諭　杉山勝榮
同　松山市造
成蹊学園小学校教諭　野村純三

表紙
齋藤　長三　さしえ　中尾　彰
齋藤　長三

昭和二十五年　月　日印刷
昭和二十五年　月　日発行
著作者　財団法人 日本新教育研究会　会長　高橋誠一郎
発行者　学校図書株式会社　代表者　川口芳太郎　東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷者　図書印刷株式会社　代表者　川口芳太郎　東京都港区芝三田豊岡町八番地
発行所　学校図書株式会社　東京都港区芝三田豊岡町八番地
定価　円

（本書の指導書・ワークブック・註釋書並びに、これに類する一切のものの無断發行を禁ずる。）

新しく出たことば

（　）のページは，ことばと文字—（新しく出たことば）—

あおいで（空を）　44
あかとんぼ　8
秋山ちよ　28
あざやか（に）　102
あざわらい（う）　42
あつ子　87
あつまって（る）　92
あまがさ　66
あやガッパ　59
あまやどり　59
ある日　94

いいたかった（い）85
いいつかった（る）54
いきもの　45
いくじ　50
いくたび　38
いずこ　46
いそごう（ぐ）　103
いたるところ　46
いつごろ　129
いっしょう　41
いばって（る）　56
いろづいた（く）　41
岩田（さん）　17

上原（さん）　15
うかべ（る）　95
うちきり　112
うで（時計）　97
うまず（に）　46
うめいて（く）　53
うらみ（がましく）53
運動具店　（18）

えいきゅう（に）　41

おいぬく　96
おいぼれた（る）　53
おおぶり　60
おかゆ　78
おかわり　91
おこしたっけ（す）90
おしゃべり　131
おそざき　42
おたがいさま　68
おでき　35
おどりだして（す）91
小野しゅう一　28
おぴえて（る）　42
おみなえし　74
おもいだして（す）95
おれ　43

かえって　14
かかえて（る）　59
——係　98
鹿児島（かごしま）35
ガス　78
火星　4
かたわら　41
学校図書館　14
かなた　57
かまど（つくり）　89
かみて　59
からんだ（む）　49
からす　（20）
かり（鳥）　6
かれあし　100
かわぞこ　92
かわはば　100
かわら　88

庫
0
72
広島大学図書
0130449672

おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書から
より良質のもの（新教科書用紙）を使
用することになつて居ります。